

## 凡例

- 一、本解題は、浮田一恵源氏絵巻（総合研究大学院大学国文学専攻蔵）について述べたものである。
- 一、上段には、各巻の画面を載せ、中下段には、画面が取材したと思われる本文、および画面についての解説を、「該当本文」  
「解題」として載せた。
- 一、本文については、石田穰<sup>二</sup>・清水好子校注『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社）を用いた。

卷名 1 桐壺



〔該当本文〕

そのころ、高麗人の参れるなかに、かしこき相人ありけるをきこしめして、宮の内に召さむことは、宇多の帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちてつかうまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつるに、相人おどろきて、あまたたび傾きあやしむ。「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためとなりて、天下を輔くるかたにて見れば、またその相違ふべし」と言ふ。弁もいと才かしこき博士にて、言ひかはしたることどもなむ、いと興ありける。文など作りかはして、今日明日歸り去りなむとするに、かくありがたき人に対面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、御子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈り物どもを捧げたてまつる。朝廷よりも多くの物賜はず。おのづからことひるごりて、漏らさせたまはねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかとおぼし疑ひてなむありける。

〔解題〕

場面は、高麗の人相見に源氏が対面するところ。向きは逆だが、京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』にも同じ場面があり、桐壺巻を絵画化するときには、よく見られる構図である。画面右が右大弁、左から二番目が光源氏、そのとなりが高麗の相人。右手下には車と従者二人が描かれている。

光源氏の装束は、雲立湧を模したものと思われる。「立湧」は、蒸気が立ち上る様子をかたどったとされるめでたい文様であり、そのため、閑白の袍や親王の袴などに用いられる。縦方向に湾曲した曲線が連続し、ふくらみの部分に様々なデザインが描かれる。当絵巻における源氏の装束には、よくみられる文様である。

巻名 2 帚木



【該当本文】

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなるこちするに、大殿油近くて、書どもなど見たまふ。近き御厨子なる、いろいろの紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆかしがれば、「さりぬべき、すこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」と、許したまはねば、「そのうちとけて、かたはらいたしとおぼされむこそゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは、数ならねど、程々につけて、書きかはしつも見はべりなむ。おのがじし、うらめしきをりをり、待ち顔ならむ夕暮れなどのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、(中略)

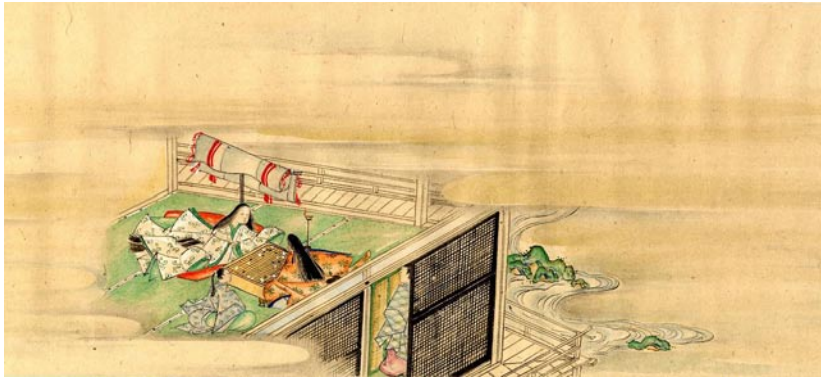
「その品々やいかに。いづれを三つの品に置きてか分くべき。もとの品高く生まれながら、身は沈み、位みじかくて、人げなき、また直人の上達部などまでなりのぼり、我は顔にて家のうちを飾り、人に劣らじと思へる、そのけぢめをばいかが分くべき」と問ひたまふほどに、左の馬の頭、藤式部の丞、御物忌にこもらむとて参れり。世のすきものにて、ものよく言ひ通れるを、中将待ちとりて、この品々をわきまへ定めあらそふ。いと聞きにくきこと多かり。

【解題】

帚木巻の物語冒頭、源氏、頭中将、左馬頭、藤式部丞が女性談義に花をさかせる雨夜の品定め場面である。よく絵画化される場面であるが、源氏、頭中将の二人のパターンと、当該場面のように四人のパターンがある。

画面中央の奥、灯台の左に位置するのが源氏、その右側が頭中将であろう。画面手前左の赤袍の人物を垂らす(垂纓)、武官は、活動の便を図って上に巻き上げ(巻纓)、この四人のなかで、武官に相当するのは左馬頭である。よって、残る青い衣の人物が、藤式部丞である。

巻名 3 空蟬



「該当本文」

人見ぬかたより引き入れて、おろしたてまつる。童なれば、宿直人なども、ことに見入れ追従せず、心やすし。東の妻戸に立てたてまつりて、われは南の隅の間より、格子たたきののしりて入りぬ。御達「あらはなり」と言ふなり。(中略)さて向かひみたらむを見ばや、と思ひて、やをら歩み出でて、簾のはさまに入りたまひぬ。

この入りつる格子はまだささねば、隙見ゆるに、寄りて西ざまに見通したまへば、この際に立てたる屏風も、端のかたおし畳まれたるに、まぎるべき几帳なども、暑ければにや、うち掛けて、いとよく見入れらる。火、近うともしたり。母屋の中柱にそばめる人やわが心かくると、まづ目とどめたまへば、濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ上に着て、頭つきほそやかに、ちひさき人の、ものげなき姿ぞしたる。顔などは、さし向かひたらむ人などにも、わざと見ゆまじうもてなしたり。手つき瘦せ瘦せにて、いたうひき隠しためり。今一人は、東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単襲、二藍の小袷だつもの、ないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはに、ぼうぞくなるもてなしたり。いと白うをかしげに、つぶつぶと肥えて、そぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ口つきいと愛敬つき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、さがりば、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり。むべこそ、親の世になくは思ふらめと、をかしく見たまふ。こちこそ、なほ静かなるけをそへばやと、ふと見ゆる。かどなきにはあるまじ、碁打ち果てて、關さすわたり、心とげに見

えて、きはきとはさうどけば、奥の人はいと静かにのどめて、「侍ちたまへや。そこは持にこそあらぬ。このわたりの劫をこそ」など言へど、「いで、このたびは負けにけり。隅のところどころ、いでいで」と指をかがめて、「十、二十、三十、四十」などかぞふるさま、伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ。すこし品おくれたり。たとしへなく口おほひて、さやかにも見せねど、目をしつとつけたまへれば、おのづからそば目に見ゆ。目すこし腫れたるこちして、鼻などもあざやかなるころなうねびれて、にははしきところも見えず、言ひ立つれば、わるきによれる容貌を、いといたうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと、目とどめつべきさましたり。

「解題」

場面は、空蟬とその継娘の軒端の萩が碁を打つところ。人物の配置としては、画面中央正面を向いているが軒端の萩、後姿が空蟬、碁盤の脇にいるのが空蟬の弟の小君、画面手前の御簾と格子の間で垣間見するのが源氏である。

空蟬巻ではよく絵画化される有名な場面である。人物の配置や向きなどにより、パターンが分かれるが、原文に「まぎるべき几帳なども、暑ければにや、うち掛けて」とあるとおり、几帳がまきあげられている様子が描かれているものが多く、当絵巻もそれを踏襲している。ただし、全体的に、簀子の位置や部屋の形など、ややゆがみのある構図となっている。



〔該当本文〕

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、侍たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、松垣といふもの新しうして、上は、半部四五間ばかりあげわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく。たちさまよふらむ下つかた思ひやるに、あながちにたけ高きこちぞする。いかなる者の集へるならむと、やうかはりておぼさる。御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は鄙のやうなる、押しあげたる、見いれのほどなく、ものはかなき住ひを、あはれに、何処かさして、と思ほしなせば、玉の台も同じことなり。きりかけたつ物に、いと青やかなるかづらの、こちよげにはひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑の眉ひらけたる。「遠方人にも申す」と、ひとりごちたまふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲きはべりける」と、申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしくうちよるぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに、はひまつはれたるを、「くちをしの花の契りや。一ふさ折りて参れ」とのたまへば、この押しあげたる門に入りて折る。さすがにさ

れたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童の、をかしげなる、出で来て、うち招く。白き扇の、いたうこがしたるを、「これに置きて参らせよ。枝もなさけなげなめる花を」とて、取らせられたる門あけて惟光の朝臣出で来たるして、奉らす。「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。ものあやめ見たまへ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまして」と、かしこまり申す。引き入れて下りたまふ。

〔解題〕

夕顔巻冒頭、乳母の見舞いに訪れた源氏が隣家の垣根に咲く白い夕顔の花に目を留め、隨身に命じて一枝所望する。場面は、隨身がその家の女童から、扇にのせた夕顔を受け取る時。源氏自身は、画面左手前の車の中にいるため、描かれていない。

夕顔を渡した女童の装束について、原文では、「黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童」とあるが、全体の色のコントラストのためか、黄色ではなく薄紅の小袿に紅袴で描かれている。

画面中央奥に御簾の中に二人の女性が描かれているのは、「上は、半部四五間ばかりあげわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく」という夕顔の君の邸内の様子を描いたものである。

巻名 5 若紫



【該当本文】

御車にたてまつるほど、大殿より、「何方ともなくしておはしましにけること」とて、御迎への人々、君達などあまた参りたまへり。頭の中将、左中弁、さらぬ君達もしたひきこえて、「かうやうの御供は、つかうまつりはべらむ、と思ひたまふるを、あさましくおくらさせたまへること」と、うらみきこえて、「いとみじき花の蔭に、しばしもやすらはず、立ち帰りはべらむは、飽かぬわざかな」とのたまふ。岩隠れの苔の上に並みゐて、土器参る。落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。頭の中将、懐なりける笛取り出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなうち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」と歌ふ。人よりは異なる君達を、源氏の君、いといたううちなやみて、岩に寄りゐたまへるは、たぐひなくゆゆしき御ありさまにぞ、何ごとにも目移るまじかりける。例の、箏篋吹く隨身、笙の笛持たせたるすきものなどあり。僧都、琴をみづから持て参りて、「これ、ただ御手一つあそばして、同じうは、山の鳥もおどろかしはべらむ」と、切に聞こえたまへば、「乱りごちいと堪へがたきものを」と聞こえたまへど、けにくからずかき鳴らして、皆立ちたまひぬ。飽かずくちをしと、いふかひなき法師、わらはべも、涙を落としあへり。まして内には、年老いたる尼君たちなど、まださらにかかる人の御ありさまを見ざりつれば、この世のものともおぼえたまはずと聞こえあへり。

【解題】

瘧病になつた源氏が、祈祷のため訪れた北山から帰京するとき、迎えにやってきた頭中將たちと、野外で宴をする場面。

人物配置としては、場面中央に白い冠直衣姿で描かれているのが源氏。源氏の手前の岩は、原文に「岩に寄りゐたまへるは」とあるのを描いたものであるう。源氏の右手で笛を吹くのが頭中將、その手前に、琴を前にしているのが北山の僧都で、源氏に演奏を勧めている。画面の右には「箏篋吹く隨身」、左側の緑の衣が「笙の笛持たせたるすきものなどあり」とある人物で、その左の何も楽器を演奏していない人物は、催馬楽「葛城」を歌つた弁の君と思われる。原文には、「扇はかなうち鳴らして」とあるが、扇は描かれていない。

若紫巻の絵画化としては、源氏が幼い紫の上を垣間見する場面が、もつとも有名であり、多数の作例があるが、当絵巻のように、北山での宴の様子を描いたものも、天理大学附属図書館蔵『源氏物語絵巻』の若紫第三段をはじめ、少なからず残っている。



【該当本文】

二条の院におはしたれば、紫の君、いとものつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに、無文の椀の細長、なよよかに着なして、何心もなくもものしたまふさま、いみじうらうたし。古代の祖母君の御なごりにて、齒黒めもまだしかりけるを、ひきつくるはせたまへれば、眉のけざやかになりたるも、うつくしうきよらなり。心から、なごか、かう憂き世を見あつかふらむ、かく心苦しきものをも見てゐたらでと、おぼしつ、例の、もろともに雛遊びしたまふ。絵などかきて色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。我もかき添へたまふ。髪いと長き女をかきたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、画にかきても見ま憂きさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いとときよなるを見たまひて、手づからこのあかばなをかきつけにほはして見たまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君見て、いみじく笑ひたまふ。「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむと、あやふく思ひたまへり。空のごひをして、「さらにごそ白まね。用なきすさびわざなりや。内裏にいかのたまはむとすらむ」と、いとまめやかにのたまふを、いといとほしとおぼして、寄りて、のごひたまへば、「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。

【解題】

当該場面は、男女が対面している場面であるが、どこを描いたものなのか判然としない。左手の男が源氏であることは確かであるが、右手の女性については確定できない。

ただし、源氏の鼻の部分を見ると、かすかに赤い筋がついているため、末摘花の巻末にて、平中のまねをして鼻を赤く塗り、若紫と戯れている場面かとも考えられる。その場面であれば、右手前の女性は若紫となる。

しかし、源氏が白い紙のようなものを手にしている。場合によっては、末摘花に手引きをした大輔の命婦と対面し、手紙を託している、あるいは受け取っている場面という可能性もある。いずれにしても、手前の女性は、末摘花ではないことは確かである。

源氏の着衣については、冬の装束である白い直衣を着ており、桐壺で述べたように、立涌とおぼしき模様が描かれている。



〔該当本文〕

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもしろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことをくちをしがりたまふ。上も、藤壺の見たまはざらむを、飽かずおぼさるれば、試樂を御前にてせさせたまふ。源氏の中將は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭の中將、容貌、用意、人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入りかたの日かげ、さやかにさしたるに、樂の聲まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや、仏の御迦陵頻伽の聲ならむと聞こゆ。おもしろくあはれるに、帝、涙をのごひたまひ、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。詠果てて、袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる樂のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。(中略)

行幸には、親王たちなど、世に残る人なくつかうまつりたまへり。春宮もおはします。例の、樂の船ども漕ぎめぐりて、唐土高麗と尽くしたる舞ども、種多かり。樂の聲、鼓の音、世をひびかす。一日の源氏の御夕影、ゆゆしうおぼされて、御誦経など所々にせさせたまふを、聞く人もことわりとあはれがりきこゆるに、春宮の女御は、あながちなりと憎みきこえたまふ。垣代など、殿上人、地下も、心異なりと世人に思はれたる有職の限りとのへさせたまへり。(中略)

木高き紅葉のかげに、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたるものの音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の葉のなかより、青海波のかかき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたるこちすれば、御前なる菊を折りて、左大將さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと、岩がくれ、山の木の葉にうづもれたるさへ、すこしものの心知るは涙おとしけり。

〔解題〕

紅葉賀冒頭、源氏と頭中將が青海波を舞う場面である。青海波は、袍を着け、波の寄せ返す様子、袖の振りで表すはなやかな舞である。紅葉賀巻においてのみならず、源氏物語を絵画化する場面としても、もつとも有名な場面の一つである。

通常青海波の舞い人は、鳥甲をかぶるが、ここでは冠に紅葉のかざしを挿している。「かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたるこちすれば、御前なる菊を折りて、左大將さしかへたまふ」とあるので、手前の菊を挿しているほうが源氏となるが、描かれている顔を見ると、やや貧弱な印象がある。





〔該当本文〕

上達部おのおのあかれ、后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかにりぬるに、月いと明うさしいでてをかしきを、源氏の君、酔ひごちに、見過ぐしがたくおぼえたまひければ、上の人々もうち休みて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやあると、藤壺あたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、かたらふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口あきたり。女御は、上の御局にやがてまうのぼりたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の枢戸もあきて、人音もせず。かやうにて、世の中にあやまちはするぞかし、と思ひて、やをらのぼりてのぞきたまふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦して、こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、「あな、むくつけ。こは誰ぞ」とのたまへど、「何かうとましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月の

おぼろけならぬ契りとぞ思ふ

とて、やをら抱きおろして、戸は押し立てつ。あさましきにあきれたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわななく「ここに、人」と、のたまへど、「まろは、皆人にゆるされたれば、召し寄せ

たりとも、なんでふことかあらむ。ただ忍びてこそ」とのたまふ声に、この君なりけりと聞き定めて、いささかなぐさめけり。わびしと思へるものから、なすけなくこはごはしうは見えじ、と思へり。酔ひごちや例ならざりけむ、ゆるさむことはくちをしきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし。らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。

〔解題〕

春の宵、ほろ酔い加減の源氏が、「朧月夜に似るものぞなき」と、口ずさみながらやつてきた美女朧月夜を見初める場面である。この花宴巻の場面も、源氏物語の絵画化では有名な場面である。このときまだ源氏は、この女性が政敵である右大臣家の六の姫とは知らずに、一夜の契りを交わした。

画面左の男性が源氏、扇を持ち、外の桜を愛でながらやつてくる女性が朧月夜である。ここにおいても、源氏は冠直衣姿で描かれているが、立湧ではなく、丸紋の模様である。



「該当本文」

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出でたまへり。隙もなう立ちわたりたるに、よそほしう引き続き立ちわづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めて、皆さし退けさするなかに、網代のすこしなれたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、ものの色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。「これは、さらに、さやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と、口ごはくて、手触れさせず。いづかたにも、若き者ども酔ひ過ぎ立ち騒ぎたるほどのことは、えしたためあへず。おとなおとなしき御前の人々は「かくな」など言へど、えとどめあへず。齋宮の御母御息所、ものおぼし乱るるなぐさめにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。つれなしつくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人もまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。

つひに御車ども立て続けつれば、ひとだまひの輿におしやられて、ものも見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば、ま

たなう人わろく、くやしう、何に来つらむと思ふにかひなし。ものも見で歸らむとしまへど、通り出でむ隙もなきに、「事なりぬ」と言へば、さすがに、つらき人の御前わたりの待たるるも、心弱しや。笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎたまふにつけても、なかなか御心づくしなり。

「解題」

源氏の正妻葵の上と、愛人の六条御息所が、車争いをする場面である。賀茂の祭の御禊の日、行列に供奉する源氏の姿を一目見たいと姿をやつしてやってきた御息所の一行が、同じく見物にやってきた葵の上方と、車の場所を求めて争いとなる。葵巻では、よく絵画化される場面である。

右側の車の車輪がはずれているのか、斜めになって下人が支えているように見受けられるので、こちらが六条御息所の一行であろう。

この場面は、絵師によつてはその争いのさまが激しく描かれることもあるが、当絵巻においては、ややのんびりした印象の絵となっている。



〔該当本文〕

北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞こえたまふに、遊びはみなやめて、心にくきはひあまた聞こゆ。何くれの人づての御消息ばかりにて、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば、いとものしとおぼして、「かうやうのありきも、今はつきなきほどになりてはべるを思ほし知らば、かう注連のほかにはもてなしたまはで、いふせうはべることをもあきらめはべりにしがな」と、まめやかに聞こえたまへば、人々、「げに、いとかたはらいたう、立ちわづらはせたまふに、いとほしう」など、あつかひきこゆれば、いさや、この人目も見苦しう、かのおぼさむことも若々しう、出でぬむが今さらにつつましきこととおぼすに、いともの憂けれど、情なうもてなさむにもたけからねば、とかくうち嘆き、やすらひて、ぬざり出でたまへる御けはひ、いと心にくし。「こなたは、簀子ばかりの許されははべりや」とて、上りぬたまへり。はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひたまへるさま、にほひ似るものなくめでたし。月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりければ、櫛をいささか折りて持たまへりけるを、さし入れて、「変らぬ色をしるべにてこそ、齋垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」と聞こえたまへば、

神垣はしるしの杉もなきものを

いかにまがへて折れる櫛ぞ

と聞こえたまへば、

少女子があたりと思へば櫛葉の

香をなつかしみとめてこそ折れ

おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり。

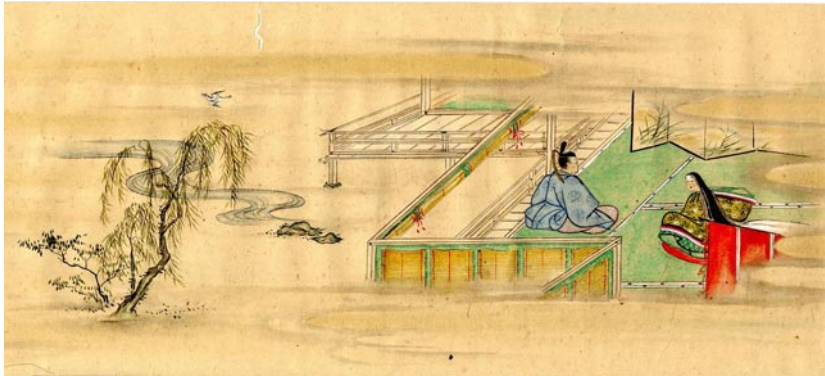
〔解題〕

娘とともに伊勢へ下る決意をして野の宮にいる六条御息所を、源氏が訪れる場面。賢木巻の絵画化としてはポピュラーな場面である。

邸内の几帳に囲まれているのが御息所で中央が源氏。画面左には、野の宮の「黒木の鳥居」が描かれている。「櫛をいささか折りて持たまへりけるを、さし入れて」とあるように、源氏は櫛の葉を手にしている。

他の絵巻や画帖などでは、「御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり」とあるのを踏まえて、御簾をかぶって部屋の中に半身が入っている源氏の様子が描かれているものもある。当絵巻では、そこまでの画力がなかったのか、御簾の位置がややゆがみ、源氏がのしかかっているように見えるかたちとなっている。

巻名 11 花散里



【該当本文】

かの本意の所は、おほしやりつるものしく、人目なく、静かにておはするありさまを見たまふも、いとあはれなり。まづ女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜ふけにけり。二十日の月さし出づるほどに、いとど木高きかげども木暗く見えわたりて、近き橘の薫りなつかしくにほひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、あくまで用意あり、あてにらうたげなり。すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、むつまじうなつかしきかたにはおぼしたりしものを、など思ひ出できこえたまふにつけても、昔のことかきつらねおぼされて、うち泣きたまふ。

郭公（ほととぎす） ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。

「いかに知りてか」など、忍びやかにうち誦したまふ。

「橘の香をなつかしみ郭公（ほととぎす）」

花散里をたづねてぞとふ

いにしへの忘れがたきなぐさめには、なほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ、まぎることども、数添ふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語もかきくづすべき人すくなうなりゆくを、まして、つれづれもまぎれなくおぼさるらむ」と聞こえたまふに、いとさらなる世なれど、ものをいとあはれにおぼし続けたる御けしきの浅からぬも、人の御さまからにや、多くあはれぞ添ひにける。

【解題】

花散里巻は、政治的な立場が危うくなるなかで、源氏が、父桐壺院の女御であった麗景殿の女御の妹で、花散里の君と呼ばれる女性を訪れることが語られている短い巻である。

当画面左の柳とおほしき木の上に描きこまれているのは、「郭公（ほととぎす） ありつる垣根のにや、同じ声にうち鳴く。したひ来にけるよとおぼさるる」とあるように、ほととぎすの飛ぶ姿である。

イメージとしては、この場面における男女は、源氏と花散里ととらえられてしまいがちである。しかし、物語の中においては、花散里よりも麗景殿の女御との昔語りに筆が費やされている。その上、前述のほととぎすをもとにして、巻名の由来となる源氏の和歌が詠まれ、それに対して麗景殿の女御が返歌をすることからすれば、この場面は、実際には源氏と麗景殿の女御とみるべきである。



〔該当本文〕

前栽の花、色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ御さまの、ゆゆしうきよらなること、所からは、ましてこの世のものと思えたまはず。白き綾のなよよかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかによみたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どもの歌ひのしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き御数珠に映えたまへるは、故里の女恋しき人々の心、皆なくさみにけり。(中略)

月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊び恋しく、所々ながめたまふらむかしと思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人、心」と誦じたまへる、例の、涙もとどめられず。入道の宮の、「霧や隔つる」とのたまはせしほど、言はむかたなく恋しく、をりをりのこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜ふけはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなくさむめぐりあはむ

月の都は遙かなれども

その夜、上のいとつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも、恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今ここにあり」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身放たず、かたはらに置きたまへり。

憂しとのみひとへにもは思ほえで

ひだりみぎにもぬるる袖かな

〔解題〕

京を去り、須磨へと謫居した源氏のわび住いの様子を描いた場面。須磨巻では、よく絵画化の題材とされている。三重襷の烏帽子直衣姿で立っているのが源氏であるが、原文では、「白き綾のなよよかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さま」という描写である。風折烏帽子をつけて、座しているのが従者の惟光と良清である。次の明石、漣標巻に描かれたものとあわせて考えると、緑の衣を着ているのが惟光であろう。

「沖より舟どもの歌ひのしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、うちながめたまひて」と、遠く沖に舟が行くのが描かれ、その横には、雁が連なって飛んでいるのが描きこまれている。この様子を見ながら、源氏たちが和歌の唱和をする。



【該当本文】

忍びてよろしき日見て、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知らせず、心一つに立ちぬ、かかやくばかりしつらひて、十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜の」と聞こえたり。君は、好きのさまやおぼせど、御直衣たてまつりひきつくるひて、夜ふかして出でたまふ。御車は二なく作りたれど、所狭しとて、御馬にて出でたまふ。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。やや遠く入る所なりけり。道のほども、四方の浦々見わたしたまひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも、まづ恋しき人の御ことを思ひ出できこえたまふに、やがて馬引き過ぎておもむきぬべくおぼす。

秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる

雲居を翔れ時の間も見む

と、うちひとりごたれたまふ。

造れるさま、木深く、いたきところまさりて、見どころある住ひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、ここにゐて、思ひ残すことはあらじとすらむと、おぼしやらるるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の聲、松風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧す。娘住ませたるかたは、心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口、けしきばかりおしあけたり。

【解題】

須磨から明石に移り住んだ源氏が、明石の入道の娘のもとへと向う場面である。「御車は二なく作りたれど、所狭しとて、御馬にて出でたまふ」と、明石の入道が車を用意したが、大げさになるからと、数人の家来を連れて馬でかけ、浜辺を行くところである。

馬に乗っているのが源氏で、「惟光などばかりをさぶらはせたまふ」とあるので、その右どりの緑の衣が惟光であろう。「道のほども、四方の浦々見わたしたまひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも」と原文にあるとおり、広々とした構図で海を描き、左上に八月十三夜の月を配している。



「該当本文」

その秋、住吉に詣でたまふ。(中略)をりしも、かの明石の人、年ごとの例のことにて詣づるを、去年今年はさはることありておこたりけるかしこまり取り重ねて、思ひ立ちけり。舟にて詣でたり。岸にさし着くるほど見れば、ののしりて詣でたまふ人のけはひ、渚に満ちて、いつくしき神宝を持て続けたり。(中略)「誰が詣でたまへるぞ」と問ふれば、「内大臣殿の御願果たしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなきほどの下衆だに、ここちよげにうち笑ふ。げにあさましう、月日もこそあれ、なかなかこの御ありさまを遙かに見るも、身のほどくちをしうおぼゆ。(中略)今日は難波に舟さしとめて、祓へをだにせむとて、漕ぎ渡りぬ。

君は夢にも知りたまはず、夜一夜いろいろのことをせさせたまふ。まことに神のよろこびたまふべきことをし尽くして、来しかたの御願にもうち添へ、ありがたきまで遊びののしり明かしたまふ。惟光やうの人は、心のうちに神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに立ち出でたまへるにさぶらひて、聞こえ出でたり。(中略)かの明石の舟、この響きにおされて過ぎぬることも聞こゆれば、知らざりけるよと、あはれにおぼす。神の御しるべをおぼし出づるもおろかならねば、いささかなる消息をだにして心なくさめばや、なかなか思ふらむかしとおぼす。御社立ちたまひて、所々に逍遙を尽くし

たまふ。難波の御祓へなど、ことによそほしうつかうまつる。堀江のわたりを御覧じて、「今はた同じ難波なる」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光、うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懐にまうけたる柄短き筆など、御車とどむる所にてたてまつれり。をかしとおぼして、畳紙に、

みをつくし恋ふるしるしにここまでも

めぐり逢ひけるえには深しな

とて、たまへれば、かしこの心知れる下人してやりけり。

「解題」

場面は、住吉詣でに来た源氏が、時同じくして参詣にやってきていた明石の上の一行のことを、従者の惟光から知らされて文を贈るところ。画面右手に小さく描かれているのが明石の一行の船。緑の衣を着て車の右側にいるのが惟光、車から少し顔をのぞかせているのが源氏である。

「御車のもと近き惟光、うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと、例にならひて懐にまうけたる柄短き筆など、御車とどむる所にてたてまつれり」と、機転を利かせた惟光が源氏に筆を差し出している様子が描かれている。



〔該当本文〕

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつる名残の雨すこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御ありきおぼし出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのことおぼし出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。おほきなる松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橋にかはりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、乱れ伏したり。見しこちする木立かなとおぼすは、早うこの宮なりけり。(中略) ふと入りたまはむこと、なほつつましようおぼさる。ゆゑある御消息もいと聞こえまほしけれど、見たまひしほどの口遅さもまだ変らずは、御使の立ちわづらはむもいとほしう、おぼしとどめつ。惟光も、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ、入らせたまふべき」と聞こゆれば、

尋ねてもわれこそとはめ道もなく

深き蓬のもの心を

とひとりごちて、なほ下りたまへば、御さきの露を、馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば、「御傘さぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて」と聞こゆ。御指貫

の裾は、いたうそほちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、入りたまふにつけても、いと無徳なるを、立ちまじり見る人なきぞ心やすかりける。

〔解題〕

蓬生巻は、須磨から帰京した後に源氏が未摘花と再会を果たすことが語られる巻である。場面は、花散里のもとへと向う途中、偶然にも未摘花がまだ朽ち果てた邸に住んでおり、自分を待ち続けていることを知った源氏が、その荒れ果てた邸へ足を踏み入れたところ。

向きは逆だが、『国宝源氏物語絵巻』蓬生巻にも同様の場面が描かれており、よく絵画化される場面といえる。「日ごろ降りつる名残の雨すこしそそきて」と、雨が降っているため、従者が源氏に傘を差しかけている。源氏の前にいるのが惟光で、深く生い茂った庭の露払いをしている。従者たちはそれぞれ風折烏帽子、源氏は普通の烏帽子という描き分けが見てとれる。





関入る日しも、この殿、石山に御願果しに詣てたまひけり。京より、かの紀伊の守などいひし子ども、迎へに来たる人々、この殿かく詣てたまふべしと告げければ、道のほど騒がしかりなむものぞとて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、所狭うゆるぎ来るに、日たけぬ。打出の浜来るほどに、殿は粟田山越えたまひぬとて、御前の人々、道もさりあへず来こみぬれば、関山に皆下りぬて、ここかしこの杉の下に車どもかきおろし、木隠れにみかしくまりて過ぐしたてまつる。車など、かたへは後らかし、先に立てなどしたれど、なほ類ひろく見ゆ。車十ばかりぞ、袖口、ものの色あひなども漏り出でて見えたる、田舎びず、よしありて、齋宮の御下りなにぞやうのわりの物見車おぼし出でらる。殿もかく世に榮え出でたまふめづらしさに、数もなき御前ども、皆目とどめたり。

九月晦日なれば、紅葉の色々こきませ、霜枯れの草、むらむらをかしよう見えわたるに、関屋より、さとはづれ出でたる旅姿どもの、色々の襖のつきづきしき縫物、括り染めのさまも、さるかたにをかしう見ゆ。御車は簾おろしたまひて、かの昔の小君、今は衛門の佐なるを召し奇せて、「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」などのたまふ御心のうち、いとあはれにおぼし出づること多かれど、おほぞうにてかひなし。女も、人知れず昔のこと忘れねば、とりかへしてものあはれなり。

行くと来とせきとめがたき涙をや

絶えぬ清水と人は見るらむ

え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし。

〔解題〕

願果しに石山詣でをする源氏と任国から帰京する常陸の守一行に同行する空蟬とが、逢坂の関にて邂逅を果たす場面である。

短い巻のため、この巻を絵画化する場合には、ほぼこの場面が選ばれるが、絵師によっては趣向が凝らされているものもある。

画面左の牛車の一行がおそらく源氏で、右手が空蟬の一行と推定される。原文からは、「車十ばかりぞ、袖口、ものの色あひなども漏り出でて見えたる、田舎びず、よしありて、齋宮の御下りなにぞやうのわりの物見車おぼし出でらる」と、常陸の守一行は、かなり大所帯であり、はなやかな様子であったことが知れるが、当画面では、荷物を担いで運ぶ下人たちが五人ほど描かれているにすぎない。



〔該当本文〕

その日と定めて、にはかなるやうなれど、をかきさまにはかなうしなして、左右の御絵ども参らせたまふ。女房の侍に御座よそはせて、北南かたがた別れてさぶらふ。殿上人は、後涼殿の簀子に、おのおの心寄せつつさぶらふ。左は、紫檀の箱に蘇芳の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に桜襲の汗衫、裃は紅に藤襲の織物なり。姿、用意など、なべてならず見ゆ。右は、沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組、花足の心ばへなど、今めかし。童、青色に柳の汗衫、山吹襲の相着たり。皆、御前に昇き立つ。上の女房、前後と装束き分けたり。

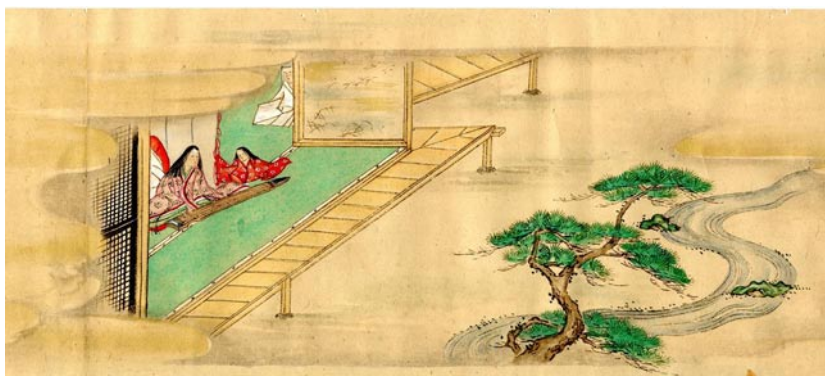
召しありて、内の大臣、権中納言、参りたまふ。その日、帥の宮も参りたまへり。いとよしありておはするうちに、絵をこのみたまへば、大臣の、下にすすめたまへるやうやあらむ、こととしき召しにはあらで、殿上におはするを、仰せ言ありて、御前に参りたまふ。この判つかうまつりたまふ。いみじう、げに描き尽くしたる絵どもあり。さらにえ定めやりたまはず。例の四季の絵も、いにしへの上手どものおもしろきことどもを選びつつ、筆とどこほらず描きながしたるさま、たとへむかたなしと見るに、紙絵は限りありて、山水のゆたかなる心ばへを見せ尽くさぬものなれば、ただ筆の飾り、人の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔のあと恥な

く、にぎははしく、あなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くのあらしひども、今日はかたがたに興あすることも多かり。

〔解題〕

源氏が養女として引き取り、後見をする六条御息所の遺児である斎宮の女御（後の秋好中宮）と、権中納言（昔の頭中将）の娘の弘徽殿の女御が、冷泉帝の御前で絵合を催す場面である。

向って左が源氏、右が権中納言である。奥の中央には冷泉帝、両脇にはその女御たちと思われる三人が描かれているが、いずれも御簾で隠し、顔を描かない手法をとっている。手前には、それぞれを鼻肩にする女房達が描かれ、画面をはなやかなものとしている。画面左端にいる人物は、源氏の弟で、当日の判者をつとめた螢兵部卿の宮であろう。



〔該当本文〕

思ふかたの風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。人に見とがめられじの心もあれば、道のほども軽らかにしなしたり。家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえられたれば、所かへたることもせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。造り添へたる廊など、ゆゑあるさまに、水の流れもをかしうしなしたり。まだこまやかなるにはあらねども、住みつかばさてもありぬべし。親しき家司に仰せ賜ひて、御まうけのことせさせたまひけり。わたりたまはむことは、とかうおぼしたばかりほどに、曰ごろ経ぬ。

なかなかもの思ひ続けられて、捨てし家居も恋しう、つれづれなれば、かの御かたみの琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたるかたにうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君、もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあがりて、

身をかへてひとり帰れる山里に

聞きしに似たる松風ぞ吹く

御方、

故里に見し世の友を恋ひわびて

さへづることを誰か分くらむ

かやうにものはかなくて明かし暮らす。

〔解題〕

明石の浦から大井に移り住んだ明石の上が、源氏の訪れを待ちわびて形見の琴をかき鳴らす場面である。琴を弾いているのが明石の上、その横には、幼い明石の姫君、襖の奥に明石の尼君が描かれる。

庭には、松の木が配され、「人離れたるかたにうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり」と、松風と琴の音が響きあう様子を描いたものと思われる。この情景を踏まえて、巻名の由来となる「松風」を詠みこんだ尼君の歌が詠まれ、それに明石の上が返歌をする。この絵もまた簀子の位置などが、ややゆがみのある構図となっている。



〔該当本文〕

この雪すこし解けてわたりたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならずおぼゆ。わが心にこそあらめ、いなびきこえむをしひてやは、あちきな、とおぼゆれど、軽々しきやうなりと、せめて思ひかへす。いとうつくしげにて、前にあたまへるを見たまふに、おろかには思ひがたかりける人の宿世かなと思ほす。この春より生ほす御髪、尼そぎのほどにて、ゆらゆらとめでたく、つらつき、まみの薫れるほどなど、言へばさらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇おしはかりたまふに、いと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。「何か、かくくちをしき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、念じあへすうち泣くけはひ、あはれなり。姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、「乗りたまへ」と引くも、いみじうおぼえて、

末遠き二葉の松に引き別れ

いつか木高きかげを見るべき

えも言ひやらす、いみじう泣けば、さりや、あな苦しとおぼして、

「生ひそめし根も深ければ武隈の

松に小松の千代をならべむ

のどかにを」と、なぐさめたまふ。さることは思

ひ静むれど、えなむ堪へざりける。乳母、少将とてあてやかなる人ばかり、御佩刀、天児やうの物取で乗る。人だまひによろしき若人、童女など乗せて、御送りに参らす。

〔解題〕

薄雲巻の前半の山場である明石の上と明石の姫君の別れの場面である。明石の上は、身分の低い自分のところで育てては姫君の瑕になると、その将来を思い、紫の上に託すことを決めた。画面は、ちょうど源氏が姫を迎えにやつてきたところである。

直衣の男性が源氏、その隣が、「母君みづから抱きて出でたまへり」と、明石の姫君を抱いて別れがたい様子の子の明石の上である。後姿で描かれているのは、明石の姫君の乳母か。画面の手前には、迎えるの車が描かれている。薄雲巻の絵画化としては、著名な場面である。



〔該当本文〕

雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光まさりて見ゆ。「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきものの身にしてみても、この世のほかのことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひ置きけむ人の心浅さよ」とて、御簾巻きあげさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見えわたされたるに、しをれたる前栽の蔭心苦しう、遣水もいいたうむせびて、池の水もえもいはずすごきに、童女おろして、雪まろばしせさせたまふ。をかしげなる姿、頭つきども、月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまさまの相乱れ着、帯しどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなうあまれる髪の末、白きにはましてもてはやしたる、いとけさやかなり。ちひさきは、童げてよろこび走るに、扇なども落ちて、うちとけ顔をかしげなり。いと多うまろばさむと、ふくつけがれど、えも押し動かさでわぶめり。かたへは、東のつまなどに出であて、心もとなげに笑ふ。

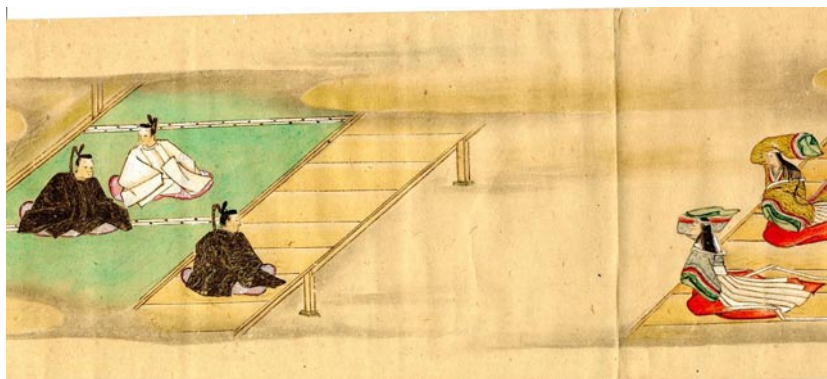
〔解題〕

この場面は、雪の降り積もった二条院の庭に童女たちをおろして、雪ころがしをさせるところ。朝顔巻を絵画化するにあたってよく題材とされる場面である。

三人の童女が雪だるまを作っている様子と、それを眺める源氏と紫の上、二人の間には火桶が置かれる、という構図は、他の源氏物語画帖などにもよく見受けられ、すでにパターン化していたものと思われる。

源氏がやや紫の上のほうを向いて描かれているが、これは、源氏が朝顔の齋院に求愛している間、夜離れがつづいたため、紫の上を慰めている様子を表している。

巻名 21 少女



「該当本文」

大学の君、胸のみふたがりて、ものなども見入れられず、屈じたくて、書も読まなめ臥したまへるを、心もやなぐさむと立ち出でて、まぎれありきたまふ。さま、容貌はめでたくをかしげにて、静やかになまめいたまへれば、若き女房などは、いとをかしと見たてまつる。(中略) 舞姫かしづきおろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りてのぞきたまへば、なやましげにて添ひ臥したり。ただかの人の御ほどと見え、今すこしそびやかに、様体などのことさらび、をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければ、こまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで、衣の裾を引き鳴らいたまふ。何心もなく、あやしと思ふに、

「あめにますとよをかひめの宮人も

わが心ざすしめを忘るな

みづがきの」とのたまふぞ、うちつけなりける。若うをかしき声なれど、誰ともえ思ひたどられず、なまむつかしきに、化粧じ添ふとて騒ぎつる後見も、近う寄りて人騒がしうなれば、いとくちをしうて、立ち去りたまひぬ。

浅葱の心やましければ、内裏へ参ることもせず、もの憂がりたまふを、五節にことつけて、直衣など、さまかはれる色ゆるされて参りたまふ。きびはにきよらなるものから、まだきにおよすけて、されあり

きたまふ。帝よりはじめたてまつりて、おぼしたるさまなべてならず、世にめづらしき御おぼえなり。

五節の参る儀式は、いづれともなく、心々に二なぐしたまへるを、舞姫の容貌、大殿と大納言殿とはすぐれたりと、めでののしる。げにいとをかしげなれど、ここしうつくしげなることは、なほ大殿のには、え及ぶまじかりけり。ものきよげに今めきて、そのものとも見ゆまじうしたてたる様体などの、ありがたうをかしげなるを、かう誉めらるるなめり。例の舞姫どもよりは、皆すこしおとなびつつ、げに心ことなる年なり。殿参りたまひて御覧するに、昔御目とまりたまひし少女の姿をおぼし出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文のうち思ひやるべし。

「解題」

少女巻の巻名の由来となった五節の舞姫の場面の絵画したものである。画面右手には、五節の舞姫が二人、左手には、三人の男性が描かれている。奥に位置する白い直衣姿の男性は、おそらく夕霧である。若年者の冬の装束である桜襲(表白、裏赤)の直衣とおぼしい。

源氏の配慮により六位とさせられた夕霧は、日頃、六位をあらわす浅葱の袍を着て参内することを物憂く思っている。しかし、五節の際には、太政大臣の子息として位階による色目の差がない直衣での参内を特に許されるため、白い直衣姿で描かれている。



「該当本文」

年の暮に、御しつらひのこと、人々の装束など、やむごとなき御列におぼしおきてたる、かかりとも田舎びたることなどやと、山がつのかたにあなづりおしはかりきこえたまひて調じたるも、たてまつりたまふついでに、織物どもの、われもわれもと、手を尽くして織りつつ持て参れる細長、小桂の、いろいろさまざまなるを御覧するに、「いと多かりけるものどもかな。方々に、うらやみなくこそものすべかりけれ」と、上に聞こえたまへば、御匣殿につかうまつれるも、こなたにせさせたまへるも、皆とう

でさせたまへり。(中略) 上も見たまひて、「いづれも、劣りまさるけぢめも見えぬものどもなめるを、着たまはむ人の御容貌に思ひよそへつつたてまつれたまへかし。着たるものさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」とのたまへば、大臣うち笑ひて、「つれなくて人の御容貌おしはからむの御心なめりな。さていづれをとかおぼす」と聞こえたまへば、「それも鏡にてはいかでか」と、さすがにはぢらひておはす。

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとは、かの御料、桜の細長に、つややかなる掻練取り添へては、姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、にほひやかならぬに、いと濃き掻練具して、夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対にたてまつれたまふを、上は見ぬやうにておぼしあはず。

(中略) かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほほゑまれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きがつややかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまうて、御料にある梔子の御衣、聴し色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに似ついたらども見むの御心なりけり。

「解題」

玉鬘巻の巻末、年の暮れに源氏が新春の晴着を女性たちに贈る衣配りの場面を描いている。「着たまはむ人の御容貌に思ひよそへつつたてまつれたまへかし」と紫の上が言ったのを受けて、源氏がそれぞれの女性に合う衣裳を見立てている様子が語られている場面である。

画面中央の冬の白い直衣を着たのが源氏、その右が紫の上である。左にいるのは、明石の姫君であるうか。二人の前には、女性に贈る衣装が御衣櫃に入られて、置かれている。緑色の衣で、よく見ると、唐草とおぼしき模様が描きこまれていることから、「かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れる」と、末摘花に贈る衣料であることがわかる。



〔該当本文〕

年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬう  
ららけさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草  
若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、  
木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらか  
にぞ見ゆるかし。まして、いとど玉を敷ける御前は、  
庭よりはじめ見所多く、磨きましたまへる御方々の  
ありさま、まねびたてむも言の葉たるまじくなむ。

春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾のう  
ちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ。  
さすがにうちとけて、やすらかに住みなしたまへり。  
さぶらふ人々も、若やかにすぐれたるを、姫君の御  
かたにと選らせたまひて、すこし大人びたる限り、  
なかなかよよししく、装束ありさまよりはじめて、  
めやすくもてつけて、ここかしこに群れあつ、歯  
固めの祝ひして、餅鏡をさへ取り寄せて、千年の陰  
にしるき年のうちの祝ひごとどもして、そぼれあへ  
るに、大臣の君さしのぞきたまへれば、懐手ひきな  
ほしつ、いとほしたなきわざかなとわびあへり。  
「いとしたりたかなるみづからの祝ひごとどもかな。  
皆おのおの思ふことの道々あらむかし。すこし聞か  
せよや。われことぶきせむ」とうち笑ひたまへる御  
ありさまを、年のはじめの栄えに見たてまつる。わ  
れはと思ひあがる中将の君ぞ、「かねてぞ見ゆる  
などこそ、鏡の影にもかたらひはべりつれ。私の祈  
りは、何ばかりのことをか」など聞こゆ。

朝のほどは人々参りこみて、もの騒がしかりける

を、夕つかた、御方々の参座したまはむとて、心こ  
とにひきつくるひ、化粧したまふ御影こそ、げに見  
るかひあめれ。「今朝この人々のたはぶれかはしつ  
る、いとうらやましく見えつるを、上にはわれ見せ  
たてまつらむ」とて、乱れたることどもすこしうち  
ませつ、祝ひきこえたまふ。

うす氷とけぬる池の鏡には

世にたぐひなきかげぞならべる

げにめでたき御あはひどもなり。

くもりなき池の鏡によるづ代を

すむべきかげぞしるく見えける

何ごとにつけても、未遠き御契りを、あらまほしく  
聞こえかはしたまふ。今日は子の日なりけり。げに  
千年の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり。

〔解題〕

初音巻冒頭、新春の六条院の様子を描いたところ。  
右手に源氏、左には紫の上、その左の後姿は女房で  
あろう。二人の前に食物を盛る器を描き込み、「歯  
固めの祝ひ」の様子を表していると思われる。庭に  
は、「梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて」  
とあるように、梅の木が描かれる。

当絵巻において、庭が描かれる場合に、遣水が描  
かれることが多いが、ここでは源氏と紫の上が「池  
の鏡」を詠みこんだ和歌を詠み交わすことから、池  
を意識して描いているように見受けられる。





〔該当本文〕

春の上の御心ざしに、仏に花たてまつらせたまふ。鳥蝶に装束き分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこしうち散りまがふ。いとうららかに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いとあはれになまめきて見ゆ。わざと平張なども移されず、御前にわたれる廊を、楽屋のさまにして、仮に胡床どもを召したり。童べども、御階のもとに寄りて、花どもたてまつる。行香の人々取りつぎて、閻伽に加へさせたまふ。御消息、殿の中将の君して聞こえたまへり。

花園の胡蝶をさへや下草に

秋まつむしはうとく見るらむ

宮、かの紅葉の御返りなりけりと、ほほゑみて御覧す。昨日の女房たちも、げに春の色は、えおとさせたまふまじかりけりと、花に折れつつ聞こえあへり。鶯のうららかなる音に、鳥の樂はなやかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなくさへづりわたるに、急になり果つるほど、飽かずおもしろし。蝶は、ましてはかなきさまに飛び立ちて、山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ入る。宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、祿取り続きて、童べに賜ふ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。か

ねてしも取りあへたるやうなり。物の師どもは、白き一襲、腰差など、つきつきに賜ふ。中将の君には、藤の細長添へて、女の装束かづけたまふ。御返り、「昨日は音に泣きぬべくこそは、

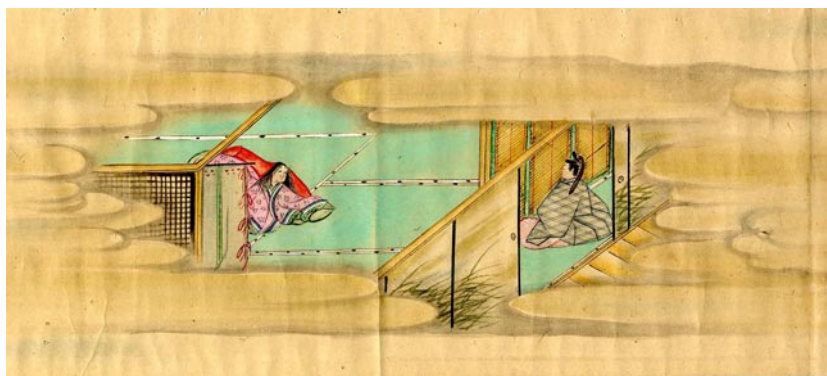
胡蝶にもさそはれなまし心ありて

八重山吹を隔てざりせば」  
とぞありける。

〔解題〕

この場面は、秋好中宮の季の御読経に、紫の上が鳥と蝶の装束をさせた女童たちを使者として供物の花を献上したところである。女童たちは八人であるが、当絵巻では、蝶が一人、雲に隠れていて見えなくなっている。左手には、龍頭鷄首の船の鷄のぼうが描かれている。

はなやかな場面のため、胡蝶巻を絵画化するときには、必ずといっていいほど題材とされる場面である。ただ、原文では、六条院の庭にて、龍頭鷄首の船上で船衆を催したのは、季の御読経の前日のことであるが、絵画化されたものをみると、両方一緒に描いており、華麗な場面をいっそう盛り上げている。



〔該当本文〕

姫君は、東面に引き入りて大殿籠りにけるを、宰相の君の御消息伝へに、ぬざり入りたるにつけて、「いとあまりあつかはしき御もてなしなり。よるづのことさまに従ひてこそめやすけれ。ひたぶるに若びたまふべきさまにもあらず。この宮たちをさへ、さし放ちたる人伝に聞こえたまふまじきことなりかし。御声こそ惜しみたまふとも、すこし気近くだにこそ」など、いさめきこえたまへど、いとわりなくて、ことづけてもはひ入りたまひぬべき御心ばへなれば、とぎまかうさまにわびしければ、すべり出でて、母屋の際なる御几帳のもとに、かたはら臥したまへる、何くれと言長き御いらへ聞こえたまふこともなく、おぼしやすらふに、寄りたまひて、御几帳の帷を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。螢を薄きかたにつつみおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくるふやうにて、にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目、いとをかしげなり。おどろかしき光見えば、宮ものぞきたまひなむ、わが女とおぼすばかりのおぼえに、かくまでのたまふなめり、人さま容貌など、いとかくしも具したらむとは、えおしはかりたまはじ、いとよく好きたまひぬべき心まどはさむと、かまへありきたまふなりけり。まことのわが姫君をば、かくしも、もて騒ぎたまは

じ、うたてある御心なりけり。異方より、やをらすべり出でてわたりたまひぬ。

宮は、人のおはするほど、さばかりとおしはかりたまふが、すこし気近きけはひするに、御心ときめさせられたまひて、えならぬ羅の帷の隙より見入れたまへるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおほえなき光のうちほのめくを、をかしと見たまふ。ほどもなくまぎらはして隠しつ。されどほのかなる光、艶なることをつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを、飽かずおぼして、げに案のごと御心にしみにけり。

〔解題〕

場面は、玉鬘が求婚者の一人で源氏の弟でもある螢兵部卿の宮と対面するところ。源氏が螢を放ち、玉鬘の美しい姿をほのかな光に浮かび上がらせる、源氏物語のなかでも最も優艶な場面の一つであり、当然多くの作例が残っている。これを機に、螢宮は、玉鬘への想いをますます募らせていくことになる。

画面左が玉鬘、右の三重襷の冠直衣姿が螢宮である。ただし、当該絵巻では、螢の光を表現し得なかつたとみえ、男女が御簾越しに対面しているだけの図様となっている。



〔該当本文〕

大臣、この北の対の今君を、いかにせむ、さかしらに迎へ率て来て、人かくそしるとて返し送らむもいと軽々しく、もの狂ほしきやうなり、かくて籠めおきたれば、まことにかしづくべき心あるかと、人の言ひなすなるもねたし、女御の御方などに交らはせて、さるをこのものにならぬ、人のいとかたはなるものに言ひおとすなる容貌はた、いとさ言ふばかりにやはある、などおぼして、女御の君に、「かの人参らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせたまひて御覽ぜよ。若き人々の言種には、な笑はせさせたまひぞ。うたてあはつけきやうなり」と、笑ひつつ聞こえたまふ。「などか、いとさことのほかにははべらむ。中将などの、いと二なく思ひはべりけむかね言に足らずといふばかりにこそははべらめ。かくのたまひ騒ぐを、はしたなう思はるるにも、かたへはかかやかしきにや」と、いとほづかしげにて聞こえさせたまふ。(中略)

やがてこの御方のたよりに、たたずみおはしてのぞきたまへば、簾高くおし張りて、五節の君とて、されたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。手はいと切におしみて、「せうさい、せうさい」とこふ声ぞ、いと舌疾きや。あなうたてとおぼして、御供の人の前駆追ふをも、手かき制したまひて、なほ妻戸の細目なるより、障子のあきあひたるを見入れ

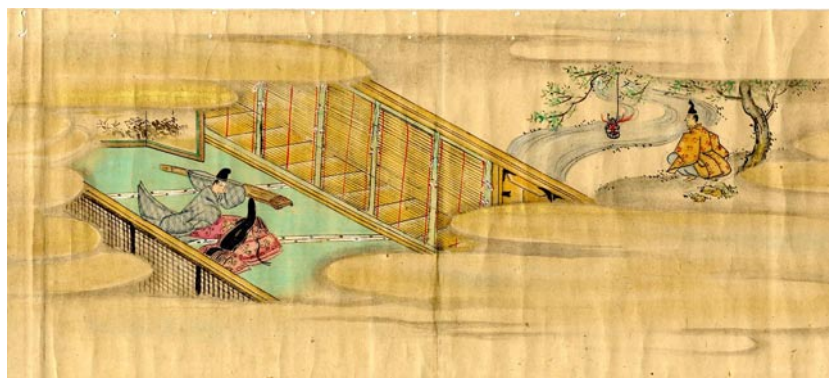
たまふ。この人も、はた、けしきはやれる、「御返しや、御返しや」と、筒をひねりて、とみにも打出でず。なかに思ひはありやすらむ、いとあさへたるさまどもしたり。容貌はひぢぢかに、愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなるを、額のいと近やかなると、声のあはつけさとにそこなはれたるなめり。取りたててよしとはなけれど、異人あらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし。

〔解題〕

内大臣(昔の頭中将)が引き取った外腹の娘、近江の君が、侍女の五節の君と双六をしている場面。左側の白い桂を着ているのが近江の君、右の赤いのが五節の君であろう。「妻戸の細目なるより、障子のあきあひたるを見入れたまふ」と原文にあるように、右手から中を覗いているのは、内大臣である。これも三重襷の冠直衣姿で描かれている。

この場面は、二人の向かい合う女を垣間見る男という構図としては、空蟬巻の垣間見とほぼ同じである。このように、一つのパターン化された構図を、碁盤を双六にするなど、多少の手を加えて別の場面とするのは、たびたび見受けられる手法である。

卷名 27 篝火



〔該当本文〕

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣も  
うらさびしきこちしたまふに、忍びかねつつ、い  
としばしばわたりたまひて、おはしまし暮らし、御  
琴なども習はしきこえたまふ。五六日の夕月夜は疾  
く入りて、すこし雲隠るるけしき、萩の音もやうや  
うあはれなるほどになりけり。御琴を枕にて、も  
ろどもに添ひ臥したまへり。かかる類ひあらむやと、  
うち嘆きがちにて夜ふかしたまふも、人の咎めたて  
まつらむことをおぼせば、わたりたまひなむとて、  
御前の篝火のすこし消えがたなるを、御供なる右近  
の大夫を召して、ともしつけさせたまふ。

いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広  
ごり臥したる檀の木の下に、打松おどろおどろしか  
らぬほどに置いて、さし退きてともしたれば、御前  
のかたは、いと涼しきをかしきほどなる光に、女の  
御さま見るにかひあり。御髪の手あたりなど、いと  
冷やかにあてはかなるこちして、うちとけぬさま  
に、ものをつつましとおぼしたるけしき、いとらう  
たげなり。帰り憂くおぼしやすらふ。「絶えず人さ  
ぶらひてともしつけよ。夏の、月なきほどは、庭の  
光なき、いとものむつかしく、おぼつかなしや」と  
のたまふ。

「篝火にたちそふ恋の煙こそ

世には絶えせぬ炎なりけれ

いつまでとかや、ふすぶるならでも、苦しき下燃え

なりけり」と聞こえたまふ。女君、あやしのありさ  
まやとおぼすに、

「行方なき空に消ちてよ篝火の

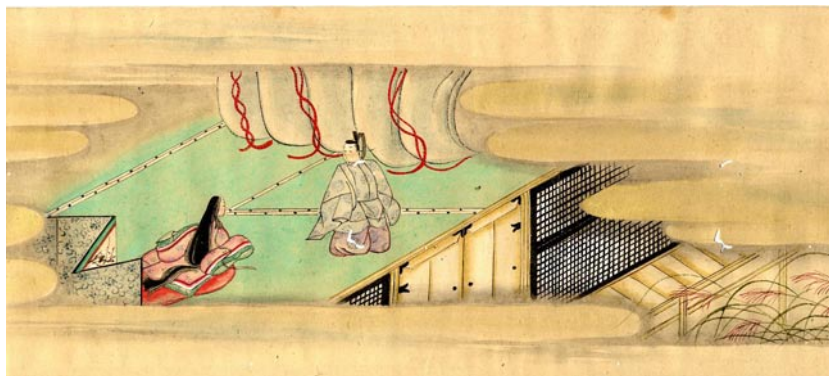
たよりにたぐふ煙とならば人のあやしと思ひはべ  
らむこと」とわびたまへば、「くはや」とて出でた  
まふに、東の対のかたに、おもしろき笛の音、箏に  
吹きあはせたり。中将の、例のあたり離れぬどち遊  
ぶにぞありける。「頭の中將にこそあなれ。いとわ  
ざとも吹きなる音かな」とて、立ちとまりたまふ。

〔解題〕

場面は、源氏と玉鬘が琴を枕に添寝をするところ。

「御供なる右近の大夫を召して、ともしつけさせた  
まふ」とあるように、画面右において、庭に篝火を  
ともしているのは、右近の大夫である。御簾を隔て  
て、画面左側には、うちとけた様子の源氏と後姿の  
玉鬘が描かれている。

篝火巻は、源氏物語の中で最も短い巻のため、絵  
画化する際には、多くはこの場面が描かれる。



〔該当本文〕

南の御殿にも、前栽つくろはせたまひけるをりにしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩、はしたなく待ちえたる風のけしきなり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。大臣は、姫君の御方におはしますほどに、中将の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸のあきたる隙を、何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて、音もせで見ろ。御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人ものにまぎるべくもあらず、気高きよらに、さとにほふこちして、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見るこちす。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。御簾の吹き上げらるるを、人々押へて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いとみじく見ゆ。花どもを心苦しがりて、え見捨てて入りたまはず。御前なる人々も、さまざまにもきよげなる姿どもは見わたさるれど、目移るべくもあらず。大臣のいと気遠くはるかにもてなしたまへるは、かく見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、いたり深き御心にて、もしかかることもやおぼすなりけり、と思ふに、けはひ恐ろしうて立ち去るにぞ、西の御方より、内の御障子引きあけてわたりたまふ。「い

とうたて、あわたたしき風なめり。御格子おろしてよ。男どもあるらむを、あらはにもこそあれ」と聞こえたまふを、また寄りて見れば、もの聞こえて、大臣もほほゑみて見たてまつりたまふ。親とおおぼえず、若くきよげにまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。女もねびとのひ、飽かぬことなき御さまどもなるを、身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて、立てる所のあらはになれば、恐ろしうて立ち退きぬ。今参れるやうにうち声づくりて、簀子のかたに歩み出でたまへれば、「さればよ。あらはなりつらむ」とて、かの妻戸のあきたりけるよと、今ぞ見とがめたまふ。年ごろかかることつゆなかりつるを、風こそげに巖も吹き上げつべきものなりけれ、さばかりの御心どもを騒がして、めづらしくうれしき目を見つるかな、とおぼゆ。

〔解題〕

この場面は、場所は野分の吹き荒れる六条院と考えられ、画面中央に描かれている人物は源氏と紫の上と推定されるが、人物造形などの貧弱さによりやや判然としない。几帳のふくらみは、野分の激しい風をはらんでいるのを表しているのであろうが、庭の薄が風になびく様子などをみても、さほど野分の激しさを感じられない。



〔該当本文〕

かうて野におはしまし着きて、御輿とどめ、上達部の平張にも参り、御装束ども、直衣、狩のよそひなどに改めたまふほどに、六条の院より、御酒、御くだものなどたてまつらせたまへり。今日つかうまつりたまふべく、かねて御けしきありけれど、御物忌のよしを奏せさせたまへりけるなりけり。蔵人の右衛門の尉を御使にて、雉一枝たてまつらせたまふ。仰せ言には何とかや、さやうのをりのことまねぶ、わづらはしくなむ。

雪深き小塩の山にたつ雉の

古きあとをも今日は尋ねよ

太政大臣の、かかる野の行幸につかうまつりたまへる例などやありけむ。大臣、御使をかしこまり、もてなさせたまふ。

小塩山みゆきつもれる松原に

今日ばかりなるあとやなからむ

と、そのころほひ聞きしことの、そばそば思ひ出でらるるは、ひがことにやあらむ。

〔解題〕

この場面は、冬に大原野への行幸があり、左右大臣以下が揃って供奉する盛儀において源氏が物忌みで不参であったことを、冷泉帝が惜しみ、勅使を遣わしたところである。

画面中央が源氏、手前が勅使である。勅使は、蔵人の右衛門の尉（本文によっては左衛門）である。当日の獲物である雉一对を献上しているが、画面では一羽のみ描かれている。物語では、短いくだりではあるが、比較的作例の多い場面である。



〔該当本文〕

かかるついでにとや思ひ寄りけむ、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、「これも御覧すべきゆゑはありけり」とて、とみにもゆるさで持たまへれば、うつたへに思ひも寄らで取りたまふ御袖を、引き動かしたり。

同じ野の露にやつるる藤袴

あはれはかけよかことばかりも

「道の果てなる」とかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知らぬさまに、やをら引き入りて、

「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば

薄紫やかことならまし

かやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかが」とのたまへば、すこしうち笑ひて、「浅きも深きも、おぼし分くかたははべりなむと思つたまふる。まめやかに、いとかたじけなき筋を思ひ知りながら、えしづめはべらぬ心のうちを、いかでかしろしめさるべき。なかなかおぼしうとまむがわびしさに、いみじく籠めはべるを、今はた同じと思つたまへわびてなむ。頭の中將のけしきは御覧じ知りきや。人の上になど思ひはべりけむ。身にてこそいとをこがましく、かつは思つたまへ知られけれ。なかなかかの君は思ひさまして、つひに御あたり離るまじき頼みに、思ひなぐさめたるけしきなど見はべるも、いとうらやましくねたきに、あはれとだにおぼしおけよ」など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、か

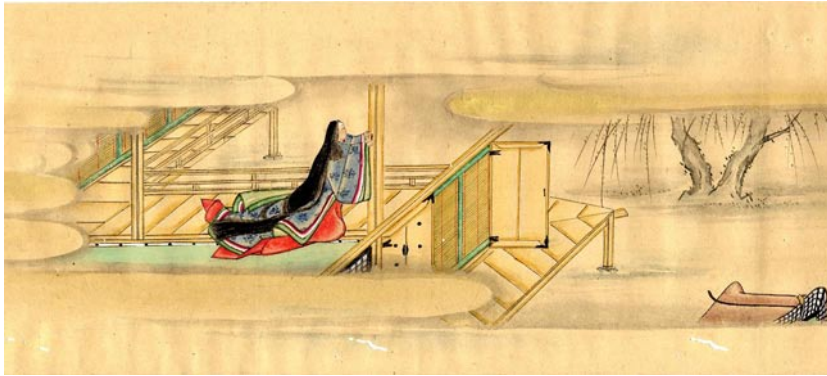
たはらいたければ書かぬなり。尚侍の君、やうやう引き入りつつ、むつかしとおぼしたれば、「心憂き御けしきかな。あやまちすまじき心のほどは、おのづから御覧じ知らるるやうもはべらむものを」とて、かかるついでに、今すこしも漏らさまほしけれど、「あやしくなやましくなむ」とて、入り果てたまひぬれば、いといたくうち嘆きて立ちたまひぬ。

〔解題〕

実の祖母の大宮（昔の頭中將の母）が薨じたことにより喪に服す玉鬘のもとに、夕霧が源氏の使いとして訪れる場面である。「蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて」と、夕霧が蘭の花（藤袴）を簾中に差し入れているところを描いている。

画面右が玉鬘、左が夕霧である。二人とも服喪中であり、原文において玉鬘は、「薄き鈍色の御衣、なつかしきほどにやつれて」と喪服であることが書かれている。また、夕霧は、「同じ色の今すこしこまやかなる直衣姿にて、纓巻きたまへる姿しも」と、巻き上げた服喪の姿であることも記されているが、視覚的要素のためか、玉鬘は山吹の小桂、夕霧は三重禪の冠直衣姿と、通常の装束で描かれている。

巻名 31 真木柱



〔該当本文〕

日も暮れ、雪降りぬべき空のけしきも、心細う見ゆる夕なり。「いたく荒れはべりなむ。早う」と、御迎への君達そのかしきこえて、御目おしのごひつつながめおはす。姫君は、殿いとかなうしたてまつりたまふならひに、見たてまつらではいかでかあらむ、今なむとも聞こえて、またあひ見ぬやうもこそあれと思ほすに、うつぶし伏して、えわたるまじと思ほしたるを、「かくおぼしたるなむ、いと心憂き」など、こしらへきこえたまふ。ただ今もわたりたまはなむと、待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなむや。常に寄りぬたまふ東面の柱を、人にゆづるこちしたまふもあはれにて、姫君、松皮色の紙の重ね、ただいささかに書き、柱の乾われたるはさまに、笄の先して押し入れたまふ。

今はとて宿かれぬとも馴れ来つる

真木の柱はわれを忘るな

えも書きやらで泣きたまふ。母君、「いでや」とて、

馴れきとは思ひ出づとも何により

立ちとまるべき真木の柱ぞ

御前なる人々も、さまざまに悲しく、さしも思はぬ木草のもとさへ恋しからむことと、目とどめて、鼻すすりあへり。

木工の君は、殿の御方の人にてとどまるに、中將のおもと、

「浅けれど石間の水は澄み果てて

宿もる君やかけ離るべき

思ひかけざりしことなり。かくて別れたてまつらむことよ」と言へば、木工、

「ともかくも岩間の水の結ぼほれ

かけとむべくも思ほえぬ世を

いでや」とてうち泣く。御車引き出でてかへり見るも、またはいかでかは見むと、はかなきこちす。梢をも目とどめて、隠るまでぞかへりみたまひける。君が住むゆゑにはあらで、こゝら年経たまへる御住処の、いかでか偲びどころなくはあらむ。

〔解題〕

強引に玉鬘と結婚した髭黒大將は、物の怪のため乱心した北の方に火取りの灰をかぶせられたことをきつかけに、自邸に寄り付かぬようになった。怒った舅の式部卿の宮は、北の方と二人の間にできた姫君を引き取ることにした。場面は、その姫君が邸を去ることを悲しみ、いつも寄り掛かっていた柱の隙間に別れの歌を書きつけた紙を笄の先で押しこんでいるところである。

この時の和歌が巻名の由来となり、後にこの姫君は、真木柱の君と呼ばれるようになった。画面右下には、車が描かれており、すでに迎えの車が来ていることを表している。





「該当本文」

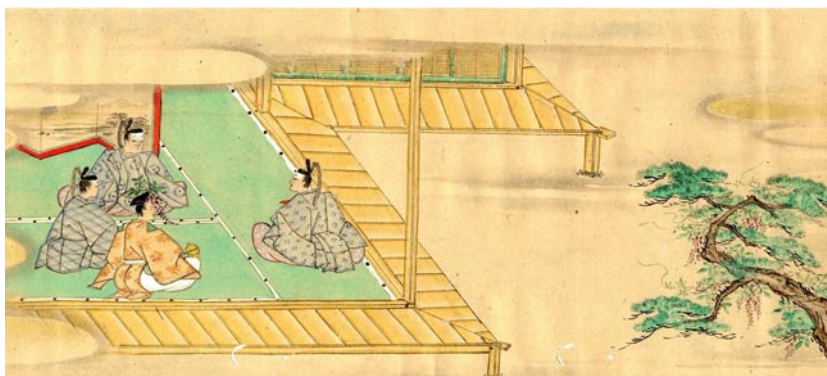
このついでに、御方々の合はせたまふども、おのおの御使して、「この夕暮のしめりにこころみむ」と聞こえたまへれば、さまさまをかしようしなしてたてまつれたまへり。「これ分かせたまへ。誰にか見せむ」と聞こえたまひて、御火取りども召してこころみさせたまふ。「知る人にもあらずや」と卑下したまへど、言ひ知らぬ匂ひどもの、進みおくれたる香一種などがいささかの咎を分きて、あながちに劣りまさりのけぢめをおきたまふ。かのわが御二種のは、今ぞ取う出させたまふ。右近の陣の御溝水のほとりにならずらへて、西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛の尉、掘りて参れり。宰相の中将、取りて伝へ参らせたまふ。宮、「いと苦しき判者にもあたりてはべるかな。いとけぶたしや」と、なやみたまふ。同じうこそは、いづくにも散りつつ広ぐるべかめるを、人々の心々に合はせたまへる深さ浅さをかぎあはせたまへるに、いと興あること多かり。

さらにいづれともなきなかに、齋院の御黒方、さいへども、心にくくしづやかなる匂ひことなり。侍従は、大臣の御、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。対の上の御は、三種あるなかに、梅花、はなやかに今めかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。夏の御方には、人々の、か

う心々にいどみたまふなるなかに、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ荷葉を一種合はせたまへり。さまかはりしめやかなる香して、あはれになつかし。冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしとおぼして、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠の朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる、心おきてすぐれたりといづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。月さし出でぬれば、大御酒など参りて、昔の御物語などしたまふ。霞める月の影心にくきを、雨の名残の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、御殿のあたりいひ知らず匂ひ満ちて、人の御こちいと艶なり。

「解題」

源氏は娘の明石の姫君が入内するにあたり、薫物の調査を紫の上をはじめとする女性たちに依頼した。源氏の弟の螢兵部卿の宮が訪れたときに、朝顔の齋院から薫物が届けられたことを機に、宮に薫物の判定を依頼し、その評を聞く場面。画面右側に位置するのが源氏、左側に横顔で描かれるのが螢宮であろう。源氏の前には、それぞれが調合した薫物が置かれている。「きさらぎの十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに」とあるよう、庭には満開の紅梅の木が描かれている。



〔該当本文〕

月はさし出でぬれど、花の色さだかにも見えぬほどなるを、もてあそぶに心を寄せて、大御酒参り、御遊びなどしたまふ。大臣、ほどなく空酔ひをしたまひて、乱りがはしく強ひ酔はしたまふを、さる心して、いたうすまひなやめり。(中略) 御時よくさうどきて、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御けしきを賜はりて、頭の中将、花の色濃く、ことに房長きを折りて、客人の御盃に加ふ。取りてもてなやむに、大臣、

紫にかことはかけむ藤の花

まつより過ぎてうれたけれども

宰相、盃を持ちながら、けしきばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよしあり。

いくかへり露けき春を過ぐし来て

花のひもとくをりにあふらむ頭の中将に賜

へば、

たをやめの袖にまがへる藤の花

見る人からや色もまさらむ次々順流るめれど、酔ひのまぎれにはかばかしからで、これよりまさらず。

七日の夕月夜、かげほのかなるに、池の鏡のどかに霞みわたれり。げに、まだほのかなる梢どもの、さうさうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁の少将、声

いとなつかしくて、葦垣を歌ふ。大臣、「いとけやけうもつかうまつるかな」とうち乱れたまひて、「年経にけるこの家の」とうち加へたまへる御声、いとおもしろし。をかしきほどに乱りがはしき御遊びにて、もの思ひ残らずなりぬめり。やうやう夜ふけゆくほどに、いたうそらなやみして、「乱りごちいと堪へがたうて、まかてむ空もほとほとしようこそはべりぬべけれ。宿直所ゆづりたまひてむや」と、中将に愁へたまふ。大臣、「朝臣や、御休み所もとめよ。翁いたう酔ひ進みて無礼なれば、まかり入りぬ」と言ひ捨てて入りたまひぬ。

〔解説〕

場面は、内大臣(昔の頭中將)が、夕霧と雲居の雁との結婚を許し、夕霧を邸に招いて宴をひらくところ。画面右には、夕霧を招く口実となつた藤が描かれている。邸内に座す四人のうち、やや離れて簀子近くにいるのがおそらく夕霧で、盃を手にしているとされる。正面を向いているのが内大臣、その隣が、内大臣の長男で夕霧の友人でもある頭中將(柏木)、黄色の衣が弁の少将(柏木の弟)であろう。

内大臣の前には、原文に、「頭の中將、花の色濃く、ことに房長きを折りて、客人の御盃に加ふ」とある藤の花を描き込んだものと考えられるが、やや中途半端な位置に描き込まれている。



〔該当本文〕

今朝は、例のやうに大殿籠り起きさせたまひて、宮の御方に御文たてまつれたまふ。ことにはづかしげもなき御さまなれど、御筆などひきつくりひて、白き紙に、

中道を隔つるほどはなけれども

心乱るる今朝のあは雪

梅につけたまへり。人召して、「西の渡殿よりたてまつらせよ」とのたまふ。やがて見出だして、端近くおはします。白き御衣どもを着たまひて、花をまさぐりたまひつつ、友待つ雪のほのかに残れる上にうち散り添ふ空をながめたまへり。鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、「袖こそ匂へ」と花をひき隠して、御簾おしあけてながめたまへるさま、夢にも、かかる人の親にて、重き位と見えたまはず、若うなまめかしき御さまなり。

御返りすこしほど経るこちすれば、入りたまひて、女君に花見せたまつりたまふ。「花といはば、かくこそ匂はまほしけれな。桜にうつしては、また塵ばかりも心わくるかたなくやあらまし」などのたまふ。「これも、あまたうつろはぬほど、目とまるにやあらむ。花の盛りに並べて見ばや」などのたまふに、御返りあり。紅の薄様に、あざやかにおし包まれたるを、胸つぶれて、御手のいと若きを、しばし見せたまつらであらばや、隔つとはなけれども、あはあはしきやうならむは、人のほどかたじけなし

とおぼすに、ひき隠したまはむも心おきたまふべければ、かたそばひろげたまへるを、後目に見おこせて添ひ臥したまへり。

はかなくてうはの空にぞ消えぬべき

風にただよふ春のあは雪

御手、げにいと若くをさなげなり。さばかりのほどになりぬる人は、いとかくはおはせぬものをと、目とまれど、見ぬやうにまぎらはして止みたまひぬ。異人の上ならば、さこそあれなどは、忍びて聞こえたまふべけれど、いとほしくて、ただ、「心やすくを思ひなしたまへ」とのみ聞こえたまふ。

〔解題〕

女三宮のもとに、不参を詫びる和歌を源氏が贈る場面である。中央に描かれた源氏が、紅梅の枝を手にしてゐるは、手紙をつけて贈った残りの枝を、「花をまさぐりたまひつつ」と原文にある様子を描いたものと思われる。ただし、和歌には、「あは雪」と詠み込まれてゐることから、本来ならば、白梅として描くべきものと推測されるが、ここでは紅梅として描かれてゐる。

源氏の右にゐるのが、文使いの女房と思われる。左側にゐるのは紫の上であり、女三宮降嫁によつて心を痛めてゐることを表してか、やや沈鬱な表情で描かれてゐる。



〔該当本文〕

廂の中の御障子を放ちて、こなたかなた御几帳ばかりをけぢめにて、中の間は、院のおはしますべき御座よそひたり。今日の拍子合はせには童べを召さむとて、右の大殿の三郎、尚侍の君の御腹の兄君、笙の笛、左大将の御太郎、横笛と吹かせて、簀子にさぶらはせたまふ。うちには、御茵ども並べて、御琴ども参りわたす。秘したまふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御琴、宮には、かくことごとしき琴はまだえ弾きたまはずやと、あやふくて、例の手馴らしたまへるをぞ、調べてたてまつりたまふ。「箏の御琴は、ゆるぶとなけれど、なほかくものに合はするをりの調べにつけて、琴柱の立処乱るるものなり。よくその心しらひととのふべきを、女はえ張りしづめじ。なほ大将をこそ召し寄せつべかめれ。この笛吹ども、まだいと幼げにて、拍子ととのへむ頼み強からず」と笑ひたまひて、「大将こなたに」と召せば、御方々はづかしく、心づかひしておはす。(中略)

これこそは、限りなき人の御ありさまなめれと見ゆるに、女御の君は、同じやうなる御なまめき姿の、今すこしにほひ加はりて、もてなしけはひ心にくく、よしあるさましたまひて、よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりて、かたはらに並ぶ花なき朝ぼらけのこちぞしたまへる。さるは、いとふくらかな

るほどになりたまひて、なやましくおぼえたまひければ、御琴もおしやりて、脇息におしかりたまへり。ささやかになよびかかりたまへるに、御脇息は例のほどなれば、およびたるこちして、ことさらに小さく作らばやと見ゆるぞ、いとあはれげにおはしける。

〔解題〕

六条院にて、紫の上、明石の上、明石の女御、女三宮が、和琴、琵琶、箏の琴、琴の琴をそれぞれ演奏する女楽の場面である。御簾を隔てた手前の簀子に在るのが、箏の調弦のために召された夕霧である。そのとなりの二人の少年たちは、拍子合わせに召された髭黒大将の三男と夕霧の長男であり、それぞれ笙の笛と横笛を奏した。

御簾の内側の白い直衣が源氏である。その左が、身分が低いため、下座に位置しているとおぼしい明石の上である。奥に描かれている女君三人のうち、一番左で脇息に寄りかかっているのが、懐妊中の明石の女御である。そのとなりの二人のどちらが紫の上か女三宮かは、この絵からは不明であるが、他の絵巻や画帖などでは、中央が女三宮、右が紫の上として描かれていることが多い。



〔該当本文〕

などかくほどもなくしなしつる身ならむと、かきくらし思ひ乱れて、枕も浮きぬばかり、人やりならず流し添へつつ、いささか隙ありとて、人々立ち去りたまへるほどに、かしこに御文たてまつれたまふ。

今は限りになりにてはべるありさまは、おのづから聞こしめすやうもはべらむを、いかがなりぬるとだに、御耳とどめさせたまはぬも、ことわりなれど、いと憂くもはべるかな。など聞こゆるに、いみじうわななけば、思ふことも皆書きさして、

今はとて燃えむ煙もむすばほれ

絶えぬ思ひのなほや残らむ

あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまどはむ道の光にもしはべらむ。と聞こえたまふ。

侍従にも、こりずまに、あはれなることどもを言ひおこせたまへり。「みづからも、今一度目ふべきことなむ」とのたまへれば、この人も、童より、さるたよりに参り通ひつつ、見たてまつり馴れたる人なれば、おほけなき心こそうたておぼえたまへれ、今はと聞くはいと悲しうて、泣く泣く、「なほこの御返り。まことにこれをとちめにもこそはべれ」と聞こゆれば、「われも、今日か明日かのこちして、もの心細ければ、おほかたのあはればかりは思ひ知らるれど、いと心憂きことと思ひ懲りにしかば、いみじうなむつつましき」とて、さらに書いたまはず。

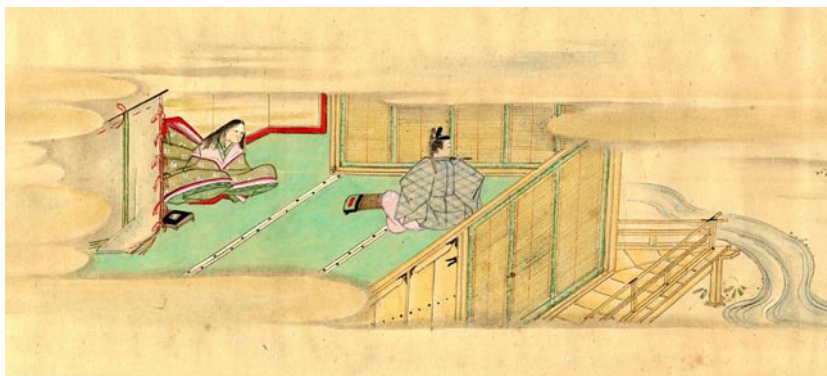
御心本性の、強くづしやかなるにはあらねど、はづかしげなる人の御けしきの、をりをりにまほならぬ

が、いと恐ろしうわびしきなるべし。されど、御硯などまかなひて責めきこゆれば、しづしづに書いたまふ。取りて、忍びて、宵のまぎれに、かしこに参りぬ。

〔解題〕

重い病の床にある柏木より手紙が送られてきて、侍女の小侍従にその返事を催促されている女三宮が描かれている場面である。右の几帳の手前にいるのが小侍従で、左の手紙を読みながら袖で顔を覆っているのが女三宮である。「御硯などまかなひて責めきこゆれば、しづしづに書いたまふ」とあるように、女三宮の前には硯が置かれている。

絵画化されている柏木巻の場面としては、この女三宮の返事を持った小侍従が柏木と対面する場面など、当場面の後にあたるものは、たびたび見受けられるが、女三宮に返事を書かせている場面に取材した作例は少ないのではないかと思われる。



〔該当本文〕

月さし出でて曇りなき空に、羽うちかはす雁がねも、列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらむかし。風膚寒く、ものあはれなるに誘はれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも、奥深き声なるに、いとど心とまり果てて、なかなか思ほゆれば、琵琶を取り寄せて、いとなつかしき音に、想夫恋を弾きたまふ。「思ひ及び顔なるは、かたはらいたけれど、これは、こと問はせたまふべくや」とて、切に簾のうちをそそのかしきこえたまへど、ましてつつまじきさしいらへなれば、宮はただものをのみあはれとおぼし続けたるに、

ことに出でて言はぬも言ふにまさるとは

人に恥ぢたるけしきをぞ見る

と聞こえたまふに、ただ末つかたをいささか弾きたまふ。

深き夜のあはればかりは聞きわけど

ことよりほかにえやは言ひける

飽かずをかしきほどに、さるおほどかなるもの音からに、古き人の心しめて弾き伝へける、同じ調べのものといへど、あはれに心すどきものの片端を掻き鳴らして止みたまひぬれば、うらめしきまでおぼゆれど、「好き好きしさを、さまざまにひき出でても御覽せられぬるかな。秋の夜ふかしはべらむも、昔のとかめやと憚りてなむ、まかではべりぬべかめる。またことさらに心してなむさぶらふべきを、こ

の御琴どもの調べ変へず待たせたまはむや。ひき違ふることもはべりぬべき世なれば、うしろめたくこそ」など、まほにはあらねど、うちにほはしおきて出でたまふ。

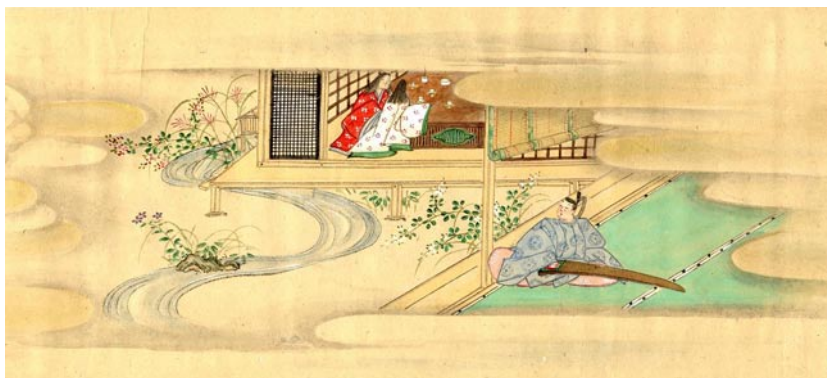
〔解題〕

夫の柏木と死に別れ、未亡人となった落葉の宮に、夕霧が想夫恋の合奏を勧めている場面と思われる。

右側の琴を前に笛を吹いているのが夕霧であり、左は落葉の宮とおぼしいが、「琵琶を取り寄せて、いとなつかしき音に、想夫恋を弾きたまふ。「思ひ及び顔なるは、かたはらいたけれど、これは、こと問はせたまふべくや」とて、切に簾のうちをそそのかしきこえたまへど」とあるように、実際には、落葉の宮は御簾の内におり、このように対面はしていない。

横笛巻は、比較的短いながらも、さまざまな場面が絵画化されており、この合奏の場面も、たびたび見受けられるものである。

巻名 38 鈴虫



〔該当本文〕

十五夜の夕暮に、仏の御前に宮おはして、端近うながめたまひつつ念誦したまふ。若き尼君たち二三  
人、花たてまつるとて鳴らす闍伽杯の音、水のけは  
ひなど聞こゆる、さま変りたるいとなみにそそきあ  
へる、いとあはれなるに、例のわたりたまひて、「虫  
の音いとしげう乱るる夕かな」とて、われも忍びて  
うち誦じたまふ阿弥陀の大呪、いと尊くほのぼの聞  
こゆ。げに声々聞こえたるなかに、鈴虫のふり出で  
たるほど、はなやかにをかし。「秋の虫の声いづれ  
となきなかに、松虫なむすぐれたるとて、中宮の、  
はるけき野辺を分けて、いとわざと尋ね取りつつ放  
たせたまへる、しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ。  
名には違ひて、命のほどはかなき虫にぞあるべき。  
心にまかせて、人間かぬ奥山、はるけき野の松原に、  
声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になむありける。  
鈴虫は、心やすく、今めいたるこそらうたけれ」な  
どのたまへば、宮、

おほかたの秋をば憂しと知りにしを

ふり捨てがたき鈴虫の声と忍びやかにのたま  
ふ。いとなまめいて、あてにおほどかなり。「いか  
にとかや。いで、思ひのほかなる御ことにこそ」とて、  
心もて草のやどりをいとへども

なほ鈴虫の声ぞふりせぬ

など聞こえたまひて、琴の御琴召して、めづらしく  
弾きたまふ。宮の御数珠引きおこたりたまひて、御

琴になほ心入れたまへり。月さし出でて、いとほな  
やかなるほどもあはれなるに、空をうちながめて、  
世の中さまさまにつけて、はかなく移り変るありさ  
まもおぼし続けられて、例よりもあはれなる音に掻  
き鳴らしたまふ。

〔解題〕

八月十五夜の夕暮れに、出家した女三宮のもとに  
いる若い尼たちが、仏前に花を供えようと準備をし  
ている様子が画面中央奥に描かれている。そこへ源  
氏がやってきて、女三宮と鈴虫を詠みこんだ和歌を  
贈答したのち、源氏が琴の琴を弾く場面である。

、『国宝源氏物語絵巻』鈴虫一などは、同じ場面  
に取材はしていても、異なる構図となっているが、  
源氏と尼たちの位置関係や、源氏が振り返っている  
様子、庭の草花など、当画面とほぼ同じ構図の作例  
は少なからず見受けられる。



「該当本文」

女君の寝たまへるに、昨夜の御座の下など、さりげなくて探りたまへど、なし。隠したまへらむほどもなければ、いと心やましようて、明けぬれど、とみにも起きたまはず。女君は、君達におどろかされて、ぬざり出でたまふにぞ、われも今起きたまふやうにて、よろづにうかがひたまへど、え見つけたまはず。女は、かく求めむとも思ひたまへらぬをぞ、げに懸想なき御文なりけりと、心にも入れねば、君達のあわて遊びあひて、雛作りひろひすゑて遊びたまふ。書読み、手習ひなど、さまざまにいとあわたたし。小さき児這ひかかり引きしろへば、取りし文のことと思ひ出でたまはず。男は、異事もおぼえたまはず、かしこに疾く聞こえむとおぼすに、昨夜の御文のさまも、えたしかに見ずなりにしかば、見ぬさまならむも、散らしてけるとおしはかりたまふべしなど、思ひ乱れたまふ。誰も誰も御台参りなどして、のどかになりぬる昼つかた、思ひわづらひて、「昨夜の御文は何ごとかありし。あやしう見せたまはで。今日もとぶらひに聞こゆべし。なやましようて、六条にもえ参るまじければ、文をこそはたてまつらめ。何ごとかありけむ」とのたまふが、いとさりげなければ、文は、をこがましよう取りてけりと、すさまじうて、そのことをばかけたまはず、「一夜の深山風に、あやまちたまへるなやましきななりと、をかしきやうにかこちきこえたまへかし」と聞こえたまふ。

「いで、このひがことな常にのたまひそ。何のをかしきやうかある。世人になずらへたまふこそ、なかなかはつかしけれ。この女房たちも、かつはあやしきまめさまを、かくのたまふとほほゑむらむものを」と、たはぶれごとに言ひなして、「その文よ。いつら」とのたまへど、とみにもひき出でたまはぬほどに、なほ物語など聞こえて、しばし臥したまへるほどに、暮れにけり。

「解題」

夕霧巻の絵画化といえは、一条御息所からの手紙を読む夕霧と後ろからそれを奪い取ろうとする雲居の雁を描いた『国宝源氏物語絵巻』夕霧の場面が有名であるが、当絵巻では、手紙を奪われた後の夕霧一家の様子が描かれている。

原文に「君達のあわて遊びあひて、雛作りひろひすゑて遊びたまふ。書読み、手習ひなど、さまざまにいとあわたたし」とあるように、画面右側では、夕霧の子供たちが遊びたわむれている様子が描かれ、左側では、雲居の雁に手紙のありかを聞いているとおぼしき夕霧が描かれている。





〔該当本文〕

風すごく吹き出でたる夕暮に、前裁見たまふとて、脇息によりゐたまへるを、院わたりて見たてまつりたまひて、「今日は、いとよく起きゐたまふめるは。この御前にては、こよなく御心もはればれしげなめりかし」と聞こえたまふ。かばかりの隙あるをも、いとうれしと思ひきこえたまへる御けしきを見たまふも、心苦しく、つひにいかにおぼし騒がむ、と思ふに、あはれなれば、

おくと見るほどぞはかなきともすれば

風に乱るる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、やよもせば消えをあらそふ露の世に

後れ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を払ひあへたまはず。宮、

秋風にしばしとまらぬ露の世を

たれか草葉のうへとのみ見む

と聞こえかはしたまふ御容貌ども、あらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがな、とおぼさるれど、心にはかなはぬことなれば、かけとめむかたなきぞ悲しかりける。「今はわたらせたまひね。乱りごちいと苦しくなりはべりぬ。いふかひなくなりけるほどといひながら、いとなめげにはべりや」とて、御几帳引き寄せて臥したまへるさまの、常よりもいとたのもしげなく見えたま

へば、いかにおぼさるるにか、とて、宮は、御手をとらへたてまつりて、泣く泣く見たてまつりたまふに、まことに消えゆく露のこちして、限りに見えたまへば、御誦経の使ども、数も知らず立ち騒ぎたり。さきさきも、かくて生き出でたまふをりにならひたまひて、御もののけと疑ひたまひて、夜一夜さまさまのことをし尽くさせたまへど、かひもなく、明け果つるほどに消え果てたまひぬ。

〔解題〕

『国宝源氏物語絵巻』御法巻においても題材としてとられている紫の上臨終の場面である。ただし、当絵巻では庭の秋草の様子などは描かれず、邸内のみの描写である。袖で顔を覆いながら泣く紫の上と明石の女御、そして中央に源氏が位置し、几帳の両脇には、女房をそれぞれ二人配している。どちらが紫の上か明石の女御かを判断することは、当該画面からはむずかしい。

巻名 41 幻



〔該当本文〕

春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは、悲しさのあらたまるべくもあらぬに、外には、例のやうに人々参りたまひなどすれど、御こちなやましきさまにもてなしたまひて、御簾のうちにのみおはします。兵部卿の宮わたりたまへるにぞ、ただうちとけたるかたにて対面したまはむとて、御消息聞こえたまふ。

わが宿は花もてはやす人もなし

なにか春のたづね来つらむ

宮、うち涙ぐみたまひて、

香をとめて来つるかひなくおほかたの

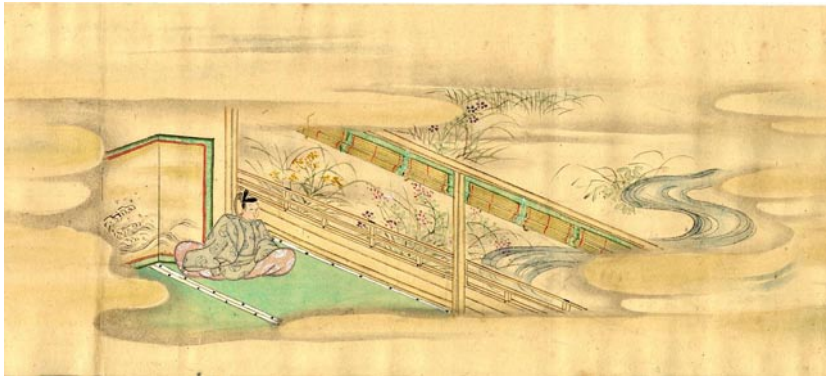
花のたよると言ひやなすべき

紅梅の下に歩み出でたまへる御さまの、いとなつかしきにぞ、これよりほかに見はやすべき人なくや、と見えたまへる。花はほのかに開けさしつ、をかしきほどのにほひなり。御遊びもなく、例に變りたること多かり。

〔解題〕

幻巻は、紫の上が亡くなった翌年正月から十二月までを、月次の風物を詠みこんだ歌でつづりながら描いている。この場面は二月で、源氏が再び訪れた春の光の中で咲く梅の花を眺めながら、その死を悼む場面である。

画面中央でたたずんでいるのが源氏。「きさらぎになれば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしく霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に、鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覧す」と、鶯の声に誘われた源氏が庭の梅を眺めに出てきたところを描いたものであろう。枝には小さく鶯が描き込まれている。



〔該当本文〕

香のかうばしきぞ、この世の匂ひならずあやしき  
 まで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほ  
 どの追風も、まことに百歩のほかも薫りぬべきこ  
 ちしける。誰も、さばかりになりぬる御ありさまの、  
 いとやつればみ、ただありなるやはあるべき、さま  
 ざまに、われ人にまさらむと、つくろひ用意すべか  
 めるを、かくかたはなるまで、うち忍び立ち寄らむ  
 ものの隈も、しるきほのめきの隠れあるまじきに、  
 うるさがりて、をさをさ取りもつけたまはねど、あ  
 またの御唐櫃にうづもれたる香の香どもも、この君  
 のは、いふよしもなき匂ひを加へ、御前の花の木も、  
 はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、  
 身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、もとの  
 薫りは隠れて、なつかしき追風ことに、折りなしか  
 らなむまさりける。

かく、あやしきまで人のとがむる香にしみたまへ  
 るを、兵部卿の宮なむ、異事よりもいどましくおぼ  
 して、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしを  
 しめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御  
 前の前裁にも、春は、梅の花園をながめたまひ、秋  
 は、世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩  
 の露にも、をさをさ御心移したまはず、老を忘るる  
 菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうな  
 どは、いとすさまじき霜枯れのころほひまでおぼし  
 捨てずなど、わざとめきて、香にめづる思ひをなむ、

立てて好ましようおはしける。かかるほどに、すこし  
 なよびやはらぎて、好いたるかたにひかれたまへり  
 と、世の人は思ひきこえたり。昔の源氏は、すべて、  
 かく立ててそのことと、やうかはり、しみたまへる  
 かたぞなかりしかし。

〔解題〕

画面左手に描かれるのは、宇治十帖の主人公薫で  
 ある。当巻はその薫の実質的な初登場になる。薫  
 は、光源氏の子として生まれながらも、幼くより自  
 分の出生の秘密について気づいており、悩み多き青  
 年として描きだされている。あまつさえ、源氏をし  
 のぐ栄達をするにつけ、世を厭う気持ちが増してく  
 る。

当画面は、そうした薫の人物像を描いたものかと  
 考えられるが、本文よりこの画面に相当する具体的  
 場面は見出せない。または、該当本文として掲出し  
 たように、生まれつき身に芳香がそなわっている薫  
 に張り合って、匂宮が薫物を好む描写に、秋の風情  
 を描いた部分があり、そこに取材して薫の内面を描  
 き出したものか。



「該当本文」

ついでに忍びがたきにや、花折らせて、急ぎ参らせたまふ。「いかがはせむ。昔の恋しき御形見には、この宮ばかりこそは。仏のかくれたまひけむ御名残には、阿難が光放ちけむを、二度出でたまへるかと思ふさかしき聖のありけるを、闇にまどふはるけ所に、聞こえをかきむかし」とて、

心ありて風のにほはず園の梅に

まづうぐひすの訪はずやあるべき

と、紅の紙に若やぎ書きて、この君の懐紙に取りまぜ、押したたみて出だしたてたまふを、幼き心に、いと馴れきこえまほしと思へば、急ぎ参りたまひぬ。

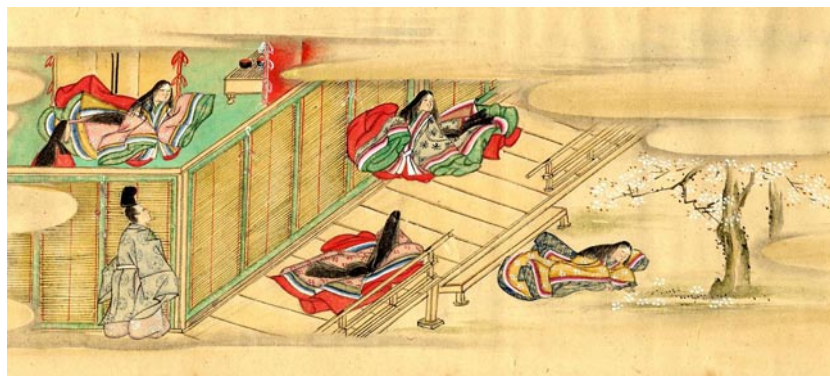
中宮の上の御局より、御宿直所に出でたまふほどなり。殿上人あまた御送りに参るうちに、見つけたまひて、「昨日は、などいと疾くはまかでにし。いつ参りつるぞ」などのたまふ。「疾くまかではべりにしくやしさに、まだ内裏におはしますと人の申しつれば、急ぎ参りつるや」と、幼げなるものから、馴れきこゆ。「内裏ならで、心やすき所にも、時々は遊べかし。若き人どもの、そこはかとなく集まる所ぞ」とのたまふ。この君召し放ちてかたらひたまへば、人々は、近くも参らず、まかで散りなどして、しめやかになりぬれば、「春宮には、暇すこしゆるされにためりな。いとしげう思ほしまとはすめりしを、時取られて人わろかめり」とのたまへば、「まつはさせたまひしこそ苦しかりしか。御前にはしも」

と聞こえさしてみれば、「われをば、人げなしと思ひ離れたるとな。ことわりなり。されどやすからずこそ。古めかしき同じ筋にて、東と聞こゆるは、あひ思ひたまひてむやと、忍びてかたらひきこえよ」などのたまふついでに、この花をたてまつれば、うち笑みて、「怨みてのちならましかば」とて、うちも置かず御覧す。枝のさま、花房、色も香も世の常ならず。「園ににほへる紅の、色に取られて、香なむ、白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこく、とり並べても咲きけるかな」とて、御心とどめたまふ花なれば、かひありてもてはやしたまふ。

「解題」

柏木亡き後、故致仕の大臣（昔の頭中将）の一家を継いだ按察の大納言が、匂宮に贈る歌をしたためている場面である。大納言の娘として、大君、中の君の二人がおり、大君はすでに東宮妃として入内したが、中の君は匂宮に差し上げようとしている。こゝは匂宮の気を惹くための和歌を贈ろうとしているのである。

和歌は、庭の紅梅にちなんで詠んだものであり、そのため画面左に紅梅の木が描きこまれている。大納言の右にいる少年は、今は大納言の妻となった真木柱の君腹の若君である。この若君が、匂宮への文使いをしている。



〔該当本文〕

中将など立ちたまひてのち、君たちは、打ちさしたまへる碁打ちたまふ。昔よりあらそひたまふ桜を賭物にて、「三番に数一つ勝ちたまはむかたに、花を寄せてむ」とたはぶれかはし聞こえたまふ。暗うなれば、端近うて打ち果てたまふ。御簾巻き上げて、人々皆いどみ念じきこゆ。をりしも例の少将、侍従の君の御曹司に來たりけるを、うち連れて出でたまひにければ、おほかた人少ななるに、廊の戸のあきたるに、やをら寄りてのぞきけり。かううれしきをりを見つけたるは、仏などのあらはれたまへらむに参りあひたらむこちするも、はかなき心になむ。夕暮の霞のまぎれは、さやかならねど、つくづくと見れば、桜色のあやめもそれと見分きつ。げに散りなむのちの形見にも見まほしく、にほひ多く見えたまふを、いとど異さまになりたまひなむこと、わびしく思ひまさらる。若き人々のうちとけたる姿ども、夕ばえをかしう見ゆ。右勝たせたまひぬ。「高麗の乱声おそしや」など、はやりかに言ふもあり。「右に心を寄せたてまつりて、西の御前に寄りてはべる木を、左になして、年ごろの御あらそひの、かかれは、ありつるぞかし」と、右方はこちよげにはげまじきこゆ。何ごとと知らねど、をかしと聞きて、さしいらへもせまほしけれど、うちとけたまへるをり、こちなくやは、と思ひて、出でて去ぬ。またかかるまぎれもやと、陰に添ひてぞうかがひありきける。君達は、花のあらそひをしつつ明かし暮らしたま

ふに、風荒らかに吹きたる夕つかた、乱れ落つるがいとくちをしうあたらしければ、負け方の姫君、

桜ゆ糸風に心のさわぐかな

思ひぐまなき花と見る見る

御方の宰相の君、

咲くと見てかつは散りぬる花なれば

負くるを深き恨みともせず

と聞こえ助ければ、右の姫君、

風に散ることは世の常枝ながら

うつろふ花をただにしも見じ

この御方の大輔の君、

心ありて池のみぎはに落つる花

あわとなりてもわが方に寄り

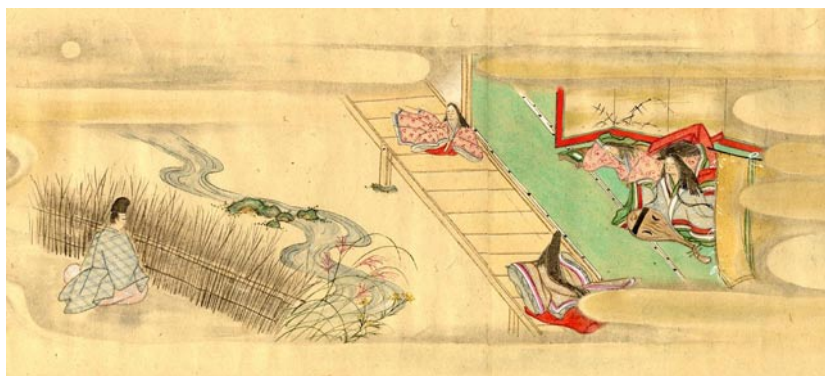
勝ち方の童女おりて、花の下にありきて、散りたるをいと多く拾ひて、持て参れり。

〔解題〕

玉鬘が髭黒との間に儲けた大君、中の君姉妹が、庭の桜を賭物として碁を打つのを、大君に想いを寄せる蔵人の少将が垣間見をする場面である。左はしに立つて垣間見をしているのが蔵人の少将。簀子にはそれぞれの姫君の女房と思われる宰相の君、大輔の君が描かれ、桜の木のもとには、「勝ち方の童女おりて、花の下にありきて、散りたるをいと多く拾ひて」とある童女が描かれている。

御簾の中で正面を向いている姫は、蔵人の少将が想いを寄せる大君であろうか。奥には姫君たちが打っていた碁盤が描きこまれている。

巻名 45 橋姫



〔該当本文〕

あなたの御前は、竹の透垣しこめて、皆隔てことなるを、教へ寄せたてまつれり。御供の人は、西の廊に呼びすゑて、この宿直人あひしらふ。

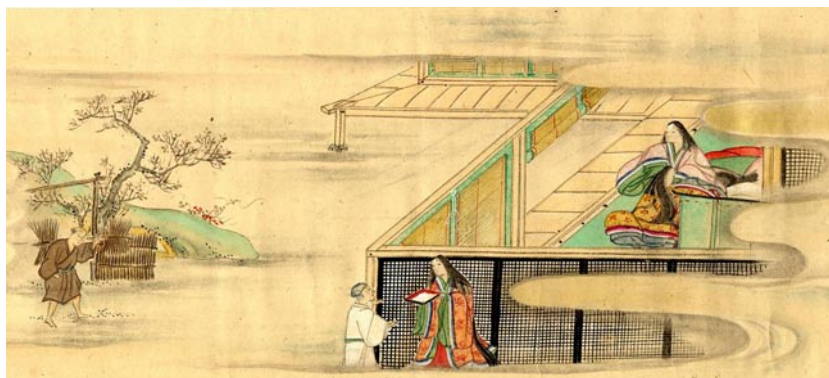
あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて見たまへば、月をかしきほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く巻き上げて、人々みたり。簀子に、いと寒げに、身細く萎えばめる童女一人、同じさまなる大人などゐたり。内なる人一人、柱に少しゐ隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつつゐたるに、雲隠れたりつる月の、にはかにいと明るさし出でたれば、「扇ならで、これしても、月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげにほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかかりて、「入る日を返す撥こそありけれ、さま異にも思ひ及びたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、今少し重りかによしづきたり。「及ばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことを、うち解けのたまひかはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、かならずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむと、憎くおしはからるるを、げにあはれなるもの隈ありぬべき世なりけりと、心移りぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また月さし出でな

むとおぼすほどに、奥のかたより、「人おはず」と告げきこゆる人やあらむ、簾おろして皆入りぬ。おどろき顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隠れぬるけはひども、衣の音もせず、いとよやかに心苦しくて、いみじうあてにみやびかなるを、あはれと思ひたまふ。

〔解題〕

宇治の大君中の君姉妹が、琴と琵琶を合奏しているところを、薫が垣間見る場面。『国宝源氏物語絵』橋姫において絵画化されているのをはじめ、構図は異なっても、よく題材となる場面である。

画面左手の直衣の男性が薫。「簀子に、いと寒げに、身細く萎えばめる童女一人、同じさまなる大人などゐたり」とあるよう、奥に童女、手前に大人の侍女の後姿が描かれる。右側の屏風と几帳の間に位置するのが、大君、中の君姉妹で、手前の琵琶が中の君、奥にある琴に「添ひ臥したる人」が大君である。



〔該当本文〕

雪霰降りしところは、いづくもかくこそはある風の音なれど、今はじめて思ひ入りたらむ山住みのこちしたまふ。女ばらなど、「あはれ、年はかはりなむとす。心細く悲しきことを、あらたまるべき春待ち出でてしがな」と、心を消たず言ふもあり。難きことかな、と聞きたまふ。向ひの山にも、時々御念仏に籠りたまひしゆゑこそ、人も参り通ひしか、阿闍梨も、いかかと、おほかたにまれにおとづれきこゆれど、今は何しにかはほのめき参らむ。いとど人目の絶え果つるも、さるべきことと思ひながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりし山がつも、おはしまさでのち、たまさかにさしのぞき参るは、めづらしく思ほえたまふ。このころのこととて、薪、木の実拾ひて参る山人どもあり。

阿闍梨の室より、炭などやうのものたてまつるとて、「年ごろにならひはべりにける宮仕への、今とて絶えはべらむが心細さになむ」と聞こえたり。かならず冬籠る山風ふせぎつべき綿衣などつかはししを、おぼし出でてやりたまふ。法師ばら、童べなどの上り行くも、見えみ見えずみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でて見送りとたまふ。「御髪などおろいたまうてけるさるかたにておはしまさましかば、かやうに通ひ参る人も、おのづからしげからまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見たてまつること絶えてやまましやは」など、かたらひたまふ。

君なくて岩のかけ道絶えしより

松の雪をもなにとかは見る

中の宮、

奥山の松葉に積る雪とだに

消えにし人を思はましかば

うらやましくぞまたも降り添ふや。

〔解題〕

姉妹の父八の宮が亡くなった後も、例年と同じように宇治山の阿闍梨から炭などが贈られてきた。場面は、その礼に、綿を入れた衣服などを贈るところ。画面右の邸内にいるのが、大君、中の君。他の場面から推して、薄紅の装束が大君、山吹が中の君であろう。中央手前には、阿闍梨の使いに綿衣を手渡す女房が描かれている。左手の薪を担いだ男性は、「このころのこととて、薪、木の実拾ひて参る山人どもあり」と、姫君たちの住む山荘に物資を納めに来た山住みの者でと思われる。



「該当本文」

みな寄り臥して、仏の御燈火もかかぐる人もなし。ものむつかしくて、忍びて人召せど、おどろかず。「こちのかき乱りなやましくはべるを、ためらひて、暁がたにもまた聞こえむ」とて、入りたまひなむとするけしきなり。「山路わけはべりつる人は、ましていと苦しけれど、かく聞こえうけたまはるになぐさめてこそはべれ。うち捨てて入らせたまひなば、いと心細からむ」とて、屏風をやをらおしあけて入りたまひぬ。いとむくつけくて、なからばかり入りたまへるに、引きとどめられて、いみじくねたく心憂ければ、「隔てなきとは、かかるをや言ふらむ。めづらかなるわざかな」と、あはめたまへるさまのいよいよをかしければ、「隔てぬ心をさらにおぼしわかねば、聞こえ知らせむとぞかし。めづらかなりとも、いかなるかたに、おぼしよるにかはあらむ。仏の御前にて誓言も立てはべらむ。うたて、な懼ぢたまひそ。御心破らじと思ひそめてはべれば、人はかくしもおしはかり思ふまじかめれど、世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや」とて、心にきほどのなる火影に、御髪のかげかりたるをかきやりつつ見たまへば、人の御けはひ、思ふやうにかをりをかしげなり。

かく心細くあさましき御住処に、好いたらむ人は障り所あるまじげなるを、われならで尋ね来る人もあらましかば、さてや止みなまし、いかにくちをし

きわざならましと、来しかたの心のやすらひさへ、

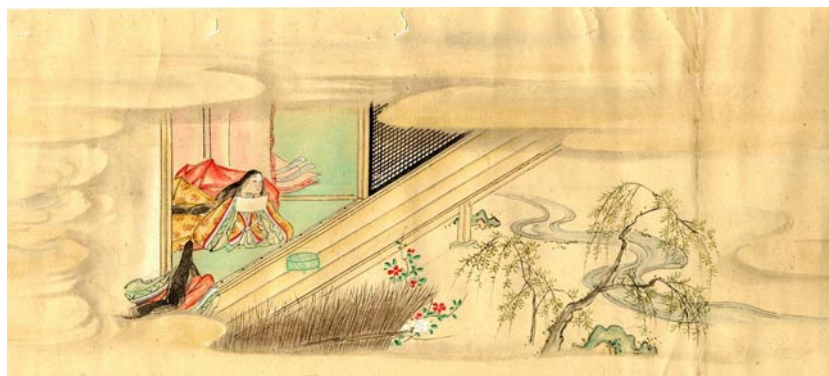
あやふくおぼえたまへど、言ふかひなく憂しと思ひて泣きたまふ御けしきの、いといとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふをりもありなむ、と思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへきこえたまふ。「かかる御心のほどを思ひよらで、あやしきまで聞こえ馴れたるを、ゆゆしき袖の色など、見あらはしたまふ心浅さに、みづからの言ふかひなさも思ひ知らるるに、さまざまなぐさむかたなく」と恨みて、何心もなくやつれたまへる墨染の火影を、いとはしたなくわびしと思ひまどひたまへり。

「解題」

宇治の山荘にて、薫が大君に言い寄る場面である。「屏風をやをらおしあけて入りたまひぬ。いとむくつけくて、なからばかり入りたまへるに、引きとどめられて」と、「画面中央が大君で、屏風を押し開けて薫が近づき、大君の裾を引いて、「引きとどめ」ている。

原文では、大君は父八宮の喪に服して墨染め衣を着ていることとあるのだが、「椎本」同様、ここでも薄紅の装束をまとっている。また、画の中では、大君は扇で顔を隠しているが、この表現は原文にはない。奥には、薫を手引きした女房（おそらくは弁の君か）とおぼしき女性が描き込まれている。





〔該当本文〕

敷しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおぼえたまふ。ゆきかふ時々にしたがひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひかはし、心細き世の憂さもつらさも、うちかたらひあはせきこえしにこそ、なくさむかたもありしか、をかしきこと、あはれなるふしをも、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心ひとつをくだきて、宮のおはしまさずなりにし悲しさよりも、ややうちまさりて恋しくわびしきに、いかにせむと、明け暮るるも知らずまどはれたまへど、世にとまるべきほどは、限りあるわざなりければ、死なれぬもあさまし。阿闍梨のもとより、

年あらたまりては、何ごとかおはしますらむ。御祈りは、たゆみなくつかうまつりはべり。今は一所の御ことをなむ、やすからず念じきこえさする。など聞こえて、蕨、つくづくし、をかしき籠に入れて、「これは童べの供養してはべる初穂なり」とてたてまつれり。手はいとあしうて、歌は、わざとがましくひき放ちてぞ書きたる。

「君にとてあまたの春を摘みしかば

常をわすれぬ初蕨なり

御前に詠み申さしめたまへ」とあり。大事と思ひまはして詠み出だしつらむ、とおぼせば、歌の心ばへ

もいとあはれにて、なほざりに、さしもおぼさぬなめりと見ゆる言の葉を、めでたく好まじげに書き尽くしたまへる人の御文よりは、こよなく目とまりて、涙もこぼるれば、返りこと書かせたまふ。

この春はたれにか見せむ亡き人の

かたみに摘める峰の早蕨

使に祿取らせさせたまふ。

〔解題〕

早蕨巻冒頭、父の八宮、姉の大君と次々に死に別れ、一人のこされた中の君が、宇治山の阿闍梨から贈られた年頭の挨拶の手紙を読んでいる場面。この巻において絵画化される代表的な場面である。

当絵巻では、簀子に置かれた竹籠は一つであるが、他の作例においては二つ描かれる場合が多い。その籠の中には、阿闍梨から手紙とともに届けられた蕨やつくしなどが入っており、それにちなんだ和歌の贈答が、阿闍梨と中の君の間でを交わされている。中の君の歌の結句「峰の早蕨」がこの巻における巻名の由来となる。



〔該当本文〕

御碁など打たせたまふ。暮れゆくまゝに、時雨をかきほほどに、花の色も夕ばえしたるを御覧じて、人召して、「ただ今、殿上には誰誰か」と問はせたまふに、「中務の親王、上野の親王、中納言源の朝臣さぶらふ」と奏す。「中納言の朝臣こなたへ」と仰せ言ありて参りたまへり。げにかく取り分きて召し出づるもかひありて、遠くよりかをれる匂ひよりはじめ、人に異なるさましたまへり。「今日の時雨、常よりことにのどかなるを、遊びなどすさまじきかたにて、いとつれづれなるを、いたづらに日を送るたはぶれにて、これなむよかるべき」とて、碁盤召し出でて、御碁の敵に召し寄す。いつもかやうに、気近くならしまつはしたまふにならひにたれば、さにこそは、と思ふに、「よき賭物はありぬべけれど、軽々しくはえわたすまじきを、何をかは」などのたまはする御けしき、いかが見ゆらむ、いとど心づかひしてさぶらひたまふ。さて打たせたまふに、三番に数一つ負けさせたまひぬ。「ねたきわざかな」とて、「まづ今日はこの花一枝ゆるす」とのたまはすれば、御いらへ聞こえさせで、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり。

世のつねの垣根にほふ花ならば

心のまゝに折りて見ましを

と奏したまへる、用意あさからず見ゆ。

霜にあへず枯れにし園の菊なれど

のこりの色はあせずもあるかな

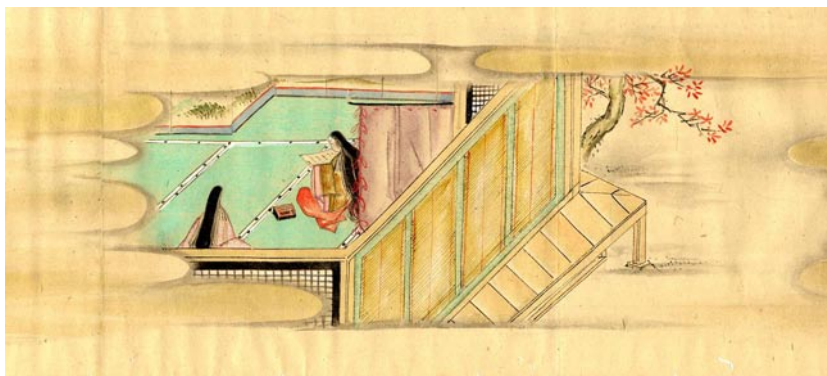
とのたまはず。

かやうに、をりをりほめかさせたまふ御けしきを、人伝ならずうけたまはりながら、例の心の癖なれば、いそがしくもおぼえず。いでや、本意にもあらず、さまざまにいとほしき人々の御ことどもをも、よく聞き過ぐしつづ年経ぬるを、今さらに聖よのもの、世に返り出でむこちすべきこと、と思ふも、かつはあやしや、ことさらに心を尽くす人だにこそあなれ、とは思ひながら、后腹におはせばしも、とおぼゆる心のうちぞ、あまりおほけなかりける。

〔解題〕

この場面は、今上帝と薫が碁を打っているところを描いている。碁盤の奥にいるのが帝、手前が薫である。

宿木巻の絵画化としては、有名な場面であり、構図は異なるが、同様の場面が『国宝源氏物語絵巻』宿木にも見られる。そちらでは相襲のくつろいだ帝の姿が全体的に描かれているが、当絵巻では、帝の顔を御簾で隠してわざと描かないようにしている。庭には、賭け碁に勝った薫に下賜されることになる菊の花が描かれている。



「該当本文」

絵など取り出でさせて、右近に詞読ませて見たまふに、向ひてもの恥ちもえしあへたまはず、心に入れて見たまへる火影、さらにこと見ゆる所なく、こまかにをかしげなり。額つきまみの薫りたるこちして、いとおほどかなるあてさは、ただそれとのみ思ひ出でらるれば、絵はことに目もとどめたまはで、いとあはれなる人の容貌かな、いかでかうしもありけるにかあらむ、故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし、故姫君は宮の御方さまに、われは母上に似たてまつりたるところは、古人とも言ふなりしか、げに似たる人はいみじきものなりけり、とおほしくらぶるに、涙ぐみて見たまふ。かれは、限りなくあてに気高きものから、なつかしうなよやかに、かたはなるまで、なよなよとたわみたるさまのしたまへりしにこそ、これは、またもてなしのうひうひしげに、よろづのことをつましうのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる、ゆるゆゆるしきはひだにもてつけたらば、大将の見たまはむにも、さらにかたはなるまじ、など、このかみに思ひあつかはれたまふ。

物語などしたまひて、暁がたになりてぞ寝たまふ。かたはらに臥せたまひて、故宮の御ことども、年ごろおはせし御ありさまなど、まほならねど語りたまふ。いとゆかしう、見たてまつらずなりにけるを、いとくちをしう悲しと思ひたり。昨夜の心知り

の人々は、「いかなりつらむな。いとらうたげなる御さまを、いみじうおぼすとも、かひあるべきことかは。いとほし」と言へば、右近ぞ、「さもあらじ。かの御乳母の、ひきすゑてすずるに語り愁へしけしき、もて離れてぞ言ひし。宮も、逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ、うちうそぶき口ずさびたまひしか。いさや、ことさらにもやあらむ、そは知らずかし。昨夜の火影のいとおほどかなりしも、事あり顔には見えたまはざりしを」など、うちささめきていとほしがらる。

「解題」

当該場面は、どこを描いたのか、判然としない。あるいは、『国宝源氏物語絵巻』東屋にも図画されている中の君が異母妹の浮舟に絵を見せて慰めている場面か。それと同じであれば、中央に描かれているのが、物語の本文を読む女房、後姿の女性が浮舟となるが、そうなると女房の姿がやや立派過ぎるようにも思われる。

また、絵を見せている場面だとすれば、中央の女性の脇にある黒い箱は、物語を納めた箱となるが、これは硯箱のようにも見える。硯箱とするなら、中央の女性は浮舟ということにもなり、母の中將の君から届けられた手紙を読んでいる場面とも解釈でき



〔該当本文〕

宮は、御馬にてすこし遠く立ちたまへるに、里びたる声したる犬どもの出で来てののしるも、いと恐ろしく、人少なに、いとあやしき御ありきなれば、すずろならむもの走り出で来たらむも、いかさまにと、さぶらふ限り心をぞまどはしける。「なほとくとく参りなむ」と言ひ騒がして、この侍従を率て参る。髪脇より掻い越して、様体いとをかしき人なり。馬に乗せむとすれど、さらに聞かねば、衣の裾をとりて、立ち添ひて行く。わが杵をはかせて、みづからは、供なる人のあやしきものはきたり。参りて、かくなむ、と聞こゆれば、かたらひたまふべきやうだになれば、山がつの垣根のおどろ葎の蔭に、障泥といふものを敷きて下したてまつる。わが御こちにも、あやしきありさまかな、かかる道にそこなはれて、はかばかしくはえあるまじき身なめり、とおぼし続けるに、泣きたまふこと限りなし。心弱き人は、ましていとみじく悲しと見たてまつる。いみじき仇を鬼につくりたりとも、おろかに見捨つまじき人の御ありさまなり。ためらひたまひて、「ただ一言もえ聞こえさすまじきか。いかなれば、今さらにかかるぞ。なほ人々の言ひなしたるやうあるべし」とのたまふ。ありさまくはしく聞こえて、「やがてさおぼしめさむ日を、かねては散るまじきさまに、たばかりさせたまへ。かくかたじけなきことどもを見たてまつりはべれば、身を捨てても思うたまへたばかりはべらむ」と聞こゆ。われも人目をいみじ

くおぼせば、一方に怨みたまはむやうもなし。

夜はいたくふけゆくに、このもの咎めする犬の声絶えず、人々追ひさげなどするに、弓ひき鳴らし、あやしき男どもの声どもして、「火あやふし」など言ふも、いと心あわたたしければ、帰りたまふほど、言へばさらなり。

「いづくにか身をば捨てむと白雲の

かからぬ山もなくなくぞゆく

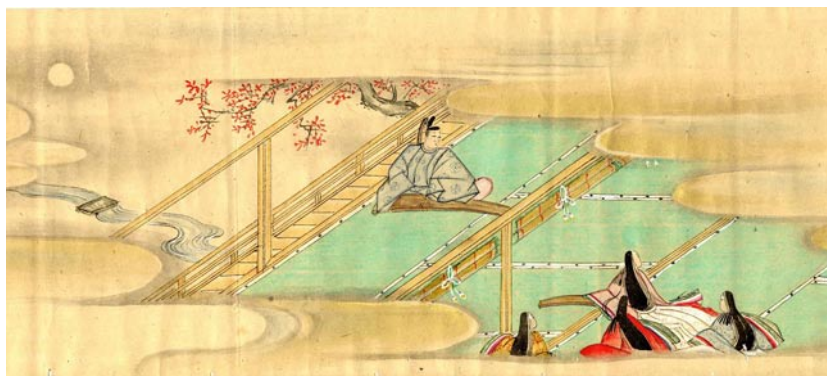
さらばはや」

とて、この人を帰したまふ。御けしきなまめかしくあはれに、夜深き露にしめりたる御香のかうばしさなど、たとへむかたなし。泣く泣くぞ帰り来たる。

〔解題〕

匂宮は浮舟に逢いに宇治を訪れたが、二人の關係を知った薫が、邸を嚴重に警護しよう命じたため、結局浮舟には逢えず、代わりに邸内から浮舟の侍女の侍従の君を連れ出し、路傍にて事情を聞くことになった。これはそれに取材して描いた匂宮と侍従の君と対面している場面である。

馬を連れてるのが匂宮の部下の時方、右下には、匂宮の従者たちが三人描かれる。「山がつの垣根のおどろ葎の蔭に、障泥といふものを敷きて下したてまつる」と、粗末な垣根が描かれるが、下に敷いた「障泥」は見当たらない。二人の前には「里びたる声したる犬ども」を表す犬が一匹描かれているが、原文にあるような恐ろしい印象のしない犬である。



〔該当本文〕

例の西の渡殿を、ありしにならひて、わざとおはしたるもあやし。姫宮、夜はあなたにわたらせたまひければ、人々月見るとて、この渡殿にうちとけて物語するほどなりけり。箏の琴いとなつかしう弾きすさぶ爪音、をかしく聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、「など、かくねたまし顔にかき鳴らしたまふ」とのたまふに、皆おどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起きあがりて、「似るべき兄やははべるべき」といらふる声、中将のおもととか言ひつるなりけり。「まろこそ御母方の叔父なれ」と、はかなきことをのたまひて、「例の、あなたにおはしますべかめりな。何わざをか、この御里住みのほどにせさせたまふ」など、あぢきなく問ひたまふ。「いづくにても、何ごとをかは。ただかやうにてこそは過ぐさせたまふめれ」と言ふに、をかしの御身のほどや、と思ふに、すずるなる嘆きの、うち忘れてしつるも、あやしと思ひ寄る人もこそ、とまぎらはしに、さし出でたる和琴を、たださながら掻き鳴らしたまふ。律の調べは、あやしくをりにあふと聞こゆる声なれば、聞きにくくもあらねど、弾き果てたまはぬを、なかなかなりと、心入れたる人は、消えかへり思ふ。わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、帝々のおぼしきつきたるさま、異事ならざりけるを、なほこの御あたりは、いとことなりけるこそあ

やしけれ、明石の浦は心にくかりける所かな、など思ひ続けることどもに、わが宿世は、いとやむごとなしかし、まして、並べて持ちたてまつらば、と思ふぞいと難きや。

〔解題〕

この場面は、蜻蛉巻後半、薫が今上帝の女一宮の女房たちと話を交わしながら琴を奏でるところ。蜻蛉巻の絵画化としては、巻末において蜻蛉を眺めながら独詠する薫を描いたものや、氷をもてあそぶ女一宮の女房達を描いたものが多く、当該場面はめずらしい場面選択といえよう。

「人々月見るとて、この渡殿にうちとけて物語するほどなりけり。箏の琴いとなつかしう弾きすさぶ」とあるように、画面左には月、右側には、女一宮の女房達が琴を奏でている様子が描かれる。突然の薫の来訪に驚いたりせずたしなみ深い応対をし、「すこしあげたる簾うちおろしなどもせず」と、簾が巻き上げられたままの状態が描かれている。



「該当本文」

翌朝は、さすがに人の許さぬことなれば、変りたらむさま見えむもいとほづかしく、髪すその、にはかにおぼとれたるやうに、しどけなくさへそがれたるを、むつかしきことども言はで、つくろはむ人もがなど、何ごとにつけてもつつましくて、暗うしなしておはす。思ふことを人に言ひ続けむ言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいてなつかしくことわるべき人さへなければ、ただ硯に向ひて、思ひあまるをりは、手習をのみ、たけきことにて書きつけたまふ。

「なきものに身をも人も思ひつつ」

捨ててし世をぞさらに捨てつる

今はかくて限りつるぞかし」と書きても、なほみづからいとあはれと見たまふ。

限りぞと思ひなりにし世の中を

かへすがへすもそむきぬるかな

同じ筋のことを、とかく書きすさびぬたまへるに、中将の御文あり。ものさわがしくあきたるこことちしあへるほどにて、かかることなむ、と言ひてけり。いとあへなしと思ひて、かかる心の深くありける人なりければ、はかなきいらへをもしそめじと、思ひ離るるなりけり、さてもあへなきわざかな、いとをかしく見えし髪のほどを、たしかに見せよと、一夜もかたらひしかば、さるべからむをりに、と言ひしものを、いとくちをしくて、たち返り、「聞こえむかたなきは、

岸遠く漕ぎ離るらむあま舟に

乗りおくれじといそがるるかな」

例ならず取りて見たまふ。ものあはれなるをりに、今と思ふもあはれなるものから、いかがおぼさるらむ、いとほかなきものの端に、

心こそ憂き世の岸を離るれど

行方も知らぬあまの浮木を

と、例の、手習にしたまへるを、包みてたてまつる。「書き写してだにこそ」とのたまへど、「なかなか書きそこなひはべりなむ」とてやりつ。めづらしきにも、言ふかたなく悲しくなむおほえける。

「解題」

出家した浮舟がひたすら手習をし、心を慰めている場面。画面中央を小野の山里の風景に費やし、右には、机に向つて繰り返し和歌を書き付けている浮舟を描く。この構図は、手習巻において常套的なものであるが、同じ構図を転用し、石山寺にて源氏物語を書き始めた紫式部を表している場合も見受けられる。

浮舟の髪が短く描かれているところから、この場面は出家後のこととらえられる。また色目の装束を着けているのは、尼としての衣裳が間に合わずにいる出家後まもない様子とも解釈できるが、当絵巻では、喪服で描くべきところを通常の装束としている場面が見受けられるため、ここもさほど意識せずに描いたものかと思われる。